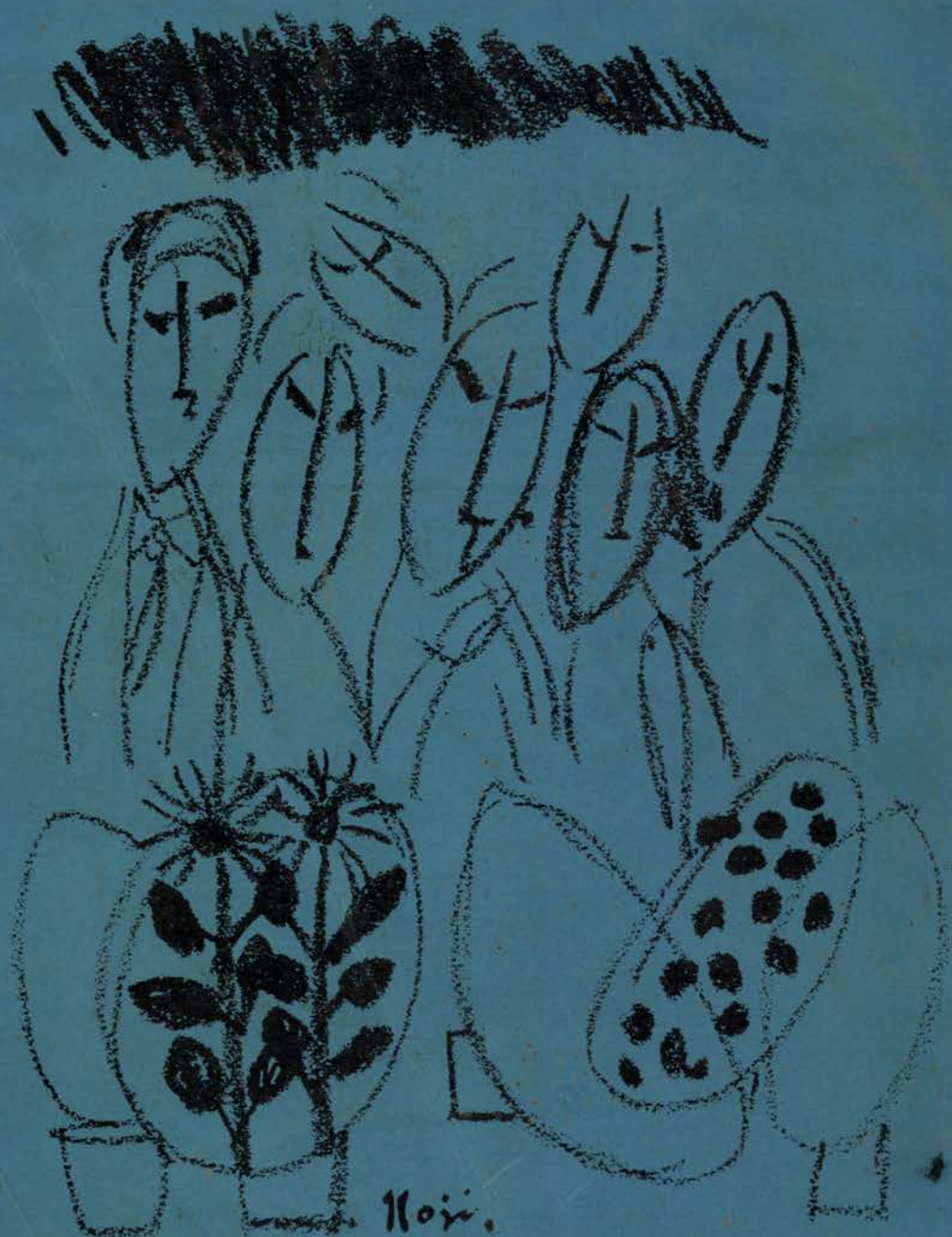


証の雅集

麻生路郎☆主宰



新春号

No. 440

Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI



えらばれ

みがきぬかれた

灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入) 一ヤハリツトル詰・一、二〇〇円

酒 清
日本盛
ニホンサカリ

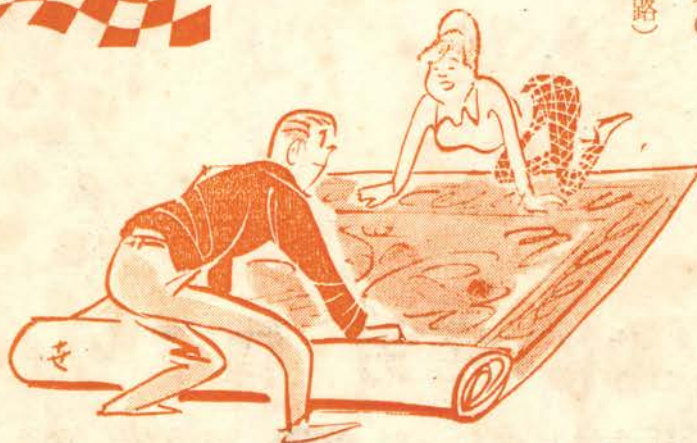
灘 西宮酒造 釀



創立50周年記念発売
(現代のカーペット)

タフトン **50**

じうたん華やか
彼氏彼の女の
愛の目目(路)



住江織物

住江織物株式会社

大阪・南・安堂寺橋通4電(251) 81~88

不朽洞句帖

麻生路郎

謹賀新春

一九六四年元旦



一月一日

老妻へ感謝の言葉も出

金婚に見馴れた顔もうれしけれ

振りむけば やっぱりついて来る妻よ

夫婦別あり 影と影

川柳雑誌新春号目次

★柳 樽 室……………(46)	一路集「暮あい」温室……………(35)	入門講座……………(36)	柳界展望……………(39)	各地柳壇……………(42)	金泥集……………(40)	近作柳樽……………(24)	同舟近詠……………(33)	川柳塔……………(6)	私達の地下街……………(32)	統川柳書架……………(22)	大万川柳「麻葉」発表……………(41)	柳志寸言……………(40)	川傍柳初篇研究(一〇)……………(18)	竜宮の乙姫……………(30)	川柳題詠句の鑑賞……………(28)	座談会「運転免許はパスしたが」……………(14)	明治大正柳誌巡礼……………(31)	あるぼんちの財界人……………(22)	新春雑感……………(4)	不朽洞句帖……………(3)	題字…麻生路郎・表紙…野尻弘
	榎・摩天楼・圭井堂・薫風子																				
	多志・文蝶・梅里																				
	丸十府・岡田甫																				
	川端柳風・高須啞三味・前田喜代人																				
	岡崎重義・清博美・藤井和雄																				

元気でいこう
元気をつかむ

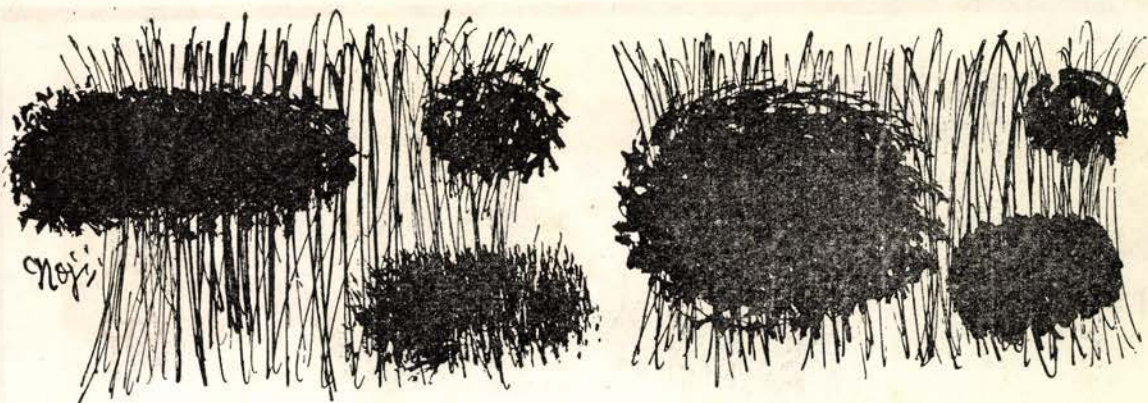
疲労・肩こり・神経痛

結合新活性ビタミン剤



フジサワ

ノイビタ®



新春雑感

麻生路郎

新春雑感——。不朽洞主人はいつも、歳末になると、この言葉に衝き当たる。一切のことにコダワルナと自分に云い聞かせても、そうはいかぬところが自分のシンショウだと思っているのである。まことに厄介な性格の持主だ。私を知ってくれてる人が、なんぼか居てくれるので生きていられたものだ。

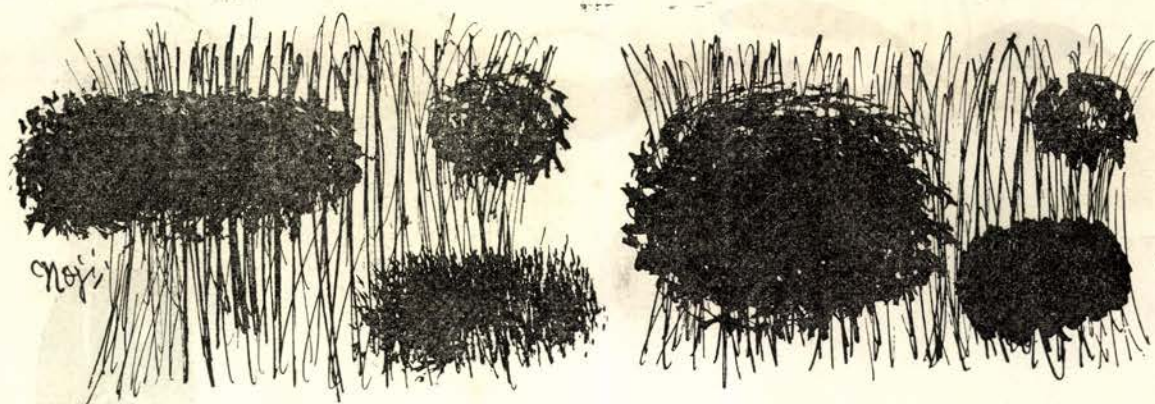
○
昨夜も午前二時半までペンを持ち続けた。一昨夜は午前一時に漸くお湯に這入った。それから又一時間ほどペンを執った。こんな日が毎日続くのである。老人のすることではないと思っても、そうしなければ私の周囲の空気が回転しないのだからやむを得ない。ベターハーフも眠い

眠いと云いながらも起きている。

ベターハーフが起きているかぎりゼロも起きていて、ストーブのハタにうずまわっている。ゼロは死亡ゼロの日に迷いこんで来た猫だが、居心地がいいのか、妻が二階へ引きあげるまで私の部屋にいる。迷い猫のことだからいつかは、どっかへ消えるものと思つて名ナシのまま半月あまり経ったが、次の住宅を見つげに出かける気配もない。妻が物干へ放り出しても、どっかから戻って来る。とうとう根負けしてうちに居てもらうことにして呼び名をつけてやることになり、死亡ゼロの日に迷いこんで来たのでゼロと名付けてやったのである。今では妻を与みし易いと思つたのか、妻と行動を共にしているの

だ。うちへ居ついてもう四、五カ月にもなろうか、からだは太って倍ほどになった。毛並みもよくなった。

○
けさ眼を覚ますと、もう妻は起きていた。新聞をベットに運んで呉れた。朝日の横山泰三氏の社会戯評をのぞくと、主婦が大きく口を開いて「まあカツギ屋のおばさん」と呆れている。その下に私設郵便の文字が小さく見える。小さいがゴジックなのでよく目立つ。カツギ屋のおばさんの背にはからだの二三倍もある袋に、〒のマークの中に一本横線を殖した芸のこまかいところを見せたマークが描かれてある。郵便ストでは絶えず被害の立場にある私を、この戯評はしばらく朗らかにして呉れ



た。茅学長が小さな親切をショウウヨウとして呉れる序に「学生諸君よ集まれ！ 諸君は歳末に山へ行くことは一大快事ではあるが、郵便の滞貨の山と取っ組むことも小さな親切以上だと思ふがどんなものであろうか」とか何とか云つてもらいたい。こんなことを書いているとこへ愛妻が「こんなものはどう」といつて、お粥と卵と、デンプという病人食を運んで呉れた。心得たものである。

○

歳末近くにケネディが暗殺されたのを皮切りに日本でも誰れ彼が消えてなくなった。リキドゥザンがヤクザ青年に刺されたのが原因で入院中に亡くなったのは意外だった。詩人の三木露風さんが亡くなられたのにはオヤオヤと思つた。すまんことだが、まだ生きていられたのかと思つたのである。歌人の佐々木信綱さんが亡くなられた。歌業に対する業績は一〇〇パーセントだし、亡くなられても不思議なお齡ではないが、私には多少の感慨がある。大正の初期だったが、講談倶楽部の文芸欄の

選者を下記の八人で担当していた。いつごろまで続いたか今、ハッキリとした記憶がないが、余り沢山な投句で、講談社が整理に困り、この欄の募集を廃止してしまったことを覚えてゐる。詩は北原白秋・野口雨情、短歌は佐々木信綱・斎藤茂吉、俳句は高浜虚子・河東碧梧桐、川柳は井上剣花坊・麻生路郎。これ等の人たちは次々と亡くなり、最後に生残っていたのが、最年長者の佐々木さんと、最年少者の私の二人だった。この二人の生き残り方は相当長く続いたが、とうとう佐々木さんが亡くなられた。この次は私の番である。その間、講談社の野間清治社長も亡くなられた。野間清治を野間濁治だと罵った廃姓外骨さんも亡くなられた。講談倶楽部の落語の懸賞当選で、スタートを切った吉川英治（川柳人雉子郎）さんも亡くなったし、吉川英治を講談社へ売り込んだ柳人矢野錦浪（岡長押切帖の谷孫六）も疾に亡く

なった。私の知る文壇、画壇、学界、其他各界の有名人の多くが亡くなり、明治は遠くなりけりの感が深い。

自ら天才六厘と称した小島六厘坊は私と同年だったし、洋画で名をなした小出檐重は私より一つ上だったが、早世したので、私には友人というよりも前世紀の人のような隔たりを感じている。早く亡くなった方がよかったか、どうかは当人が亡くなっているのだから何んとも云えない。

偉らそうなことを云つても、人間は、寝転べば畳一帖ふさぐのみ（路郎）だ。

結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣装も
豊富にそろえております ●6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171



川柳塔

麻生路郎選

マスゲームお師匠さんを見直す日

大島みかん狩添乗記

みかん狩り爪を黄色にしてレディー

防府市 長野井蛙

言論の自由をボスが目で押え

ソツのない世辞小僧から叩き上げ

岡山県 直原七面山

養老院を言うて子供を当てにせず

美しき誤解柿の実まだ青し

テラブコーダーに生きてる亡父のギャグ声

土なめてみて百姓にある自信

無骨さが社長夫人の眼に出来ない

色も香も失せ老嬢の手に聖書

鳥取市 河村日満

解散の万才ハッ当たりもあらん

また選挙ですねと妻の気の弱し

月が待ち切れずビールを茶がわりに

大阪市 牟田一哲

文明とやばんの共存さだけ出し

全快へなんにも云えず涙ぐみ

プロマイド見ればプロにもひけとらず

倉敷市 木村千・容

天高し両巨は月の旅の夢

素隠居のおどけがほして過す日々

大阪市 中島生々庵

耐えてゆくための老軀をうづくまり

風向きがあつて家風がからまわり

老友つどい飛鳥の里の飛鳥鍋

理性きびしくまともに俺の老いを知る

豊中市 若本多久志

ファッションとやらが解らぬままに老け

湯豆腐でよし淡々と妻の酌

大阪市 正本水客

天守閣へ上る柱の影が濃く

悪人の顔してみても始まらず

別れてきて移り香もなき人と知る

薬師寺東塔ナイトー

十六夜へ自然がいいと灯り消す

高槻市 若柳潮花

うち出しへもう川風の泌みる街

横櫛の粋が舞台にまだ残り

生々庵先生の舞台より(二句)

助六を通す楽屋は道をあけ

伊達姿廓の雨は晴れかかり

大阪府 西いわを

手術台誰憚ろうイエス様

朝の鐘ミレーの絵にはならなんだ

人様の金で自分の顔を立て

大阪府 北川春巢

ウエットになって菊人形を出る

セールの胸まさきに羽根をつけ

喪章とればもうビジネスの顔になり

小企業今更ら週休などと書き

ハワイ 羽佐間柳葉

総入歯昔の味がなつかしい

帰化しても県人会に顔を出し

堺市 吉田圭井堂

賢弟は事業の鬼で子供なく

自己顕示型とは知らず引っかかり

生んだ子の数でもめる倦怠期

下関市 国弘半休

山口国体散見

幸福は頭がサッと切り vari

われながら善意過剰を悟る秋

太っ腹人の長短見る目あり

倉敷市 田垣方大

気に入らぬ報告背中で聞く課長

時期を見てなどとりあげないつもり

初日の出何も願わぬ幸福さ

大阪市 木村水洞

政権を握る強味の嘘がさえ

事故防ぐ対策費用出しおし

子に読ますつもりで買って来た論語

恩給の額が気になる齢になり

米子市 小西雄々

アカハタを神経質な顔で読み

面会は借金取りと知る守衛

金網に入れた仏像おがまされ

大阪市 後藤梅志

無くならないものは人間の知恵か

人を信じるのが出来この頃幸福

死ぬものは寿命小川の流れとも

ぜんそくに何を云うても張りがぬけ

腹の中でみくびったのが顔に出る

大阪市 山川阿茶

優良児表彰状へ寝てしまひ

落選へ心して吹け暮の風

当選は又々貯める気十二月

風雪に堪え人生に巾が出来

若がっていてもレンズに見破られ

飽いて来た二号を妻が可愛がり

加賀市 那谷光郎

へそくりに男も慣れて飼育され

義理つとめこも重なり赤字とは

大阪市 福井野迷路

御焼香しながら順序が気にくわず

仏だんを焼いても癌は死ぬ創価

よぼよぼと晩秋の蠅は淋しかろ

嘘知らぬ幼児の様にと宣えど

あっさり死んだ年寄り羨まれ

三猿坊逝く

散る紅葉残る紅葉が送ってる

出雲市 尼緑之助

忘れ物年齢のせいとは忌々し

追い出されたように菊見に老夫婦

久家代仕男氏夫人の死

運命とは方程式の枠の外

鳥取市 大西八歩

鳥取砂丘

人影の絶えて砂丘の吐息する

父と子と気まづく出会うパチンコ屋

急救車近所で止まる十二月

下関市 桜川不水

活け花の首うなだれて妻の留守

みの虫一つ夕焼け空へぶうらぶら

岡山市 浜田久米雄

印刷をした門松で官舎明け

飲めるだけ飲めと二級酒を出され

鳥取市 杉谷湖山

アクセサリーにされて英字紙泣いて居る

パンプスを履いて田舎をふり向かず

京都府 大鶴喜由

一年生先生の綽名引きつがれ

博文を四五枚積みめばうんと云う

物量と言葉の綾で出来た仲

尼崎市 小林文月

正月に出した碁盤のうすい塵

初出勤はや片足を踏まれたり

奈良県 飯降白香

午後の授業軒かく生徒へ秋の陽が

マスコミにかきまわされた自殺です



大阪へ復帰

門真市 福島 鉄 児

天主閣再び見るとここに住み

岡山市 服部 十九平

繙帯の子を抱き保母もすべり台

大物になれぬタイプの鞆持ち

岡山県 大森 娘 句 楽

ペンを執る心お得意さまのもの

心なや用心堀を埋めて建て

裏切りの裏見抜かれた口ごもり

背番号候補を長島も笑い

選挙中死ねてよかった花輪が来

機関車が一層大きく見えて無事

尼崎市 長谷川 三司

裸せに酔った手で買う宝くじ

秋の夜の夫婦に柿のまだ渋し

汲取りの不平拝啓市長様

すきま風ビエロは鼻を赤く塗る

岡山県 田村 藤 波

新札の博文お鯉さん連れず

言わでものことまで言うた夜が寒い

児島市 本田 恵 二朗

週末へ満潮みたいの子ら戻る

愚夫愚妻せつせとクコをのみ続け

東京弁田舎の耳へ才女めき

幕切れのバンザイ議員の泣き笑い

京都市 松川 杜 的

振袖が悲しく触れる琴の糸

ヒロインの末路を綴る字がゆがみ

鳥取市 森本 法 泉 子

妻手術を受く

手術室何やら音がする許り

川西市 竹内 圭 三

掌を合わすことさえ知らぬ観光車

化粧して仏も秋を稼がされ

ハイウェーおらがの村を真二つ

堺市 高崎 雄 声

憤懣はせめて座席を広くとり

見渡せば唯我独尊ばかり居て

島根県 藤井 明 朗

人様の裏素っぱ抜く週刊誌

鼻声がいつしかあんだと変って居

諦めて帰える師走の灯のきつう

岡山県 永松 東 岸

木枯しと来た電報に驚かされ

十二月どの家の灯もあたたかく

十二月手品のように金が消え

十二月やはり落着く外はなし

久米雄句集「凡人」を読んで

遙かなるわが行く道の灯となさん

倉敷市 野田 素 身 郎

待人は来ず喫茶店出れば雨

砂遊びしていたらしい手で迎え

公約を信じた一票にはあらず

芦屋市 丸川 初 甫

八頭身顔は微笑の観世音

唐津市 新岡 回 天 子

若々し大統領が先に逝き

一、二分がこんなに良い気起きられず

片手では出来ない芸へ諦める

岡山県 池田 古 心

農機具の購入皆んな借りた金

東京都 石居 高 志

ふと見れば猫のひたいの庭も秋

総選挙夫唱婦随で無事に済み

独身の社長斗志の権化で居

大阪府 早川 清 生

衆愚を叱る首相一人は出てもよし

おとんぼがきさくな八百屋でいる旧家

就職

学ぶべき高きもの捨て背広得る

大阪市 西 出一 栄

菊の葉の天ブラ秋を召し上られ

ストーブのコマーシャルから冬が来る

装身具あれこれ老いても女なる

大阪市 西田 柳 宏子

初詣でのように澄した朝帰り

神妙な顔で屠蘇酌ぐ妻若し

元旦の晴着へカメラ忙しい

堺市 辻 圭 水

ノーネクタイ見つからないも一等車

公約も果してないに解散し

希望の灯消さず親とは弱いもの

遭難の場所を烏に教えられ

大阪市 橋高 薫 風子

日向ほこ梅干の種口にあり

城のある町への旅は恋に似る

羽根ペンで書きし嘗ての文学よ

君おもう熱もまじれる風邪の熱

下関市 中村 九 呂 平

止めていた煙草年金から始め

咲き了えたコスモス邪見に捨てられる

大阪市 西川 晃

「悪書追放」それから悪書ばかり売れ

あーしんど敬語をたんとつかわされ

器用貧乏じょうずに襦袢かえている

こつまなんきんみたいな嫁にしかれとり

おやおや池田はんから妻へ文

「当選御礼」どの顔もあぶらざり

死屍るいらい新代議士の足の下

神戸市 仲 どんたく

秋の酒浮世のことは棚上げし

虫聞いているのか風呂に音がなし

娘の寝顔明日嫁ぎゆく娘の寝顔

不発弾抱くが如し君と居て

十日振り一年逢わぬ顔で逢い

大阪市 本 多 柳 志

住みよい国にしてくれる筈のが落ち

事前運動と見られたくない墓参り

文化の日こんなところにも菊花展

近江路

絵葉書の通り琵琶湖は昏れてくれ

出雲市 原 独 仙

まな板に似た顔アチャコにある人気

晩年は吉と占い信じたが

煙り出す役も重要舞台裏

西宮市 野 呂 鶴 汀

茶をたてる妻があやしく他人めき

失恋はただ雑踏を歩きたし

落葉焼く趣味があるとか別荘地

新潟県 高野 むじな

先生の出張坐り込みだった

貸しボート女尊男卑の国に見せ

うちの子より金をかけてる大見て米

大阪市 石 倉 旅 風

八ッ橋を噛んでいれ歯を試しけり

日が経ってから弟子愛情を感じ

こども連れ子の無い夫婦振りむかせ

スイッチを入れると文化的家庭

大阪市 魚 住 満 潮

続西成界わい

文化の日終日バチンコ屋で過し

元旦を一枚きりの背広で出る

俺の情婦お前の情婦と十八九

除夜の鐘質屋の土間で聴いている

元日をカストロ髭はおいたまま

愛媛県 村 上 旭 童

絶景の中で炭やく外はなく



疲れたともいわずになにかはってねて
老犬の薄目をあけて見たばかり

神戸市 傍島 静馬

団地族祭の寄付をあてにされ
サクラ今日髪も着物も変えている
ゼロに近いおやじのテレビ聴取率
庭の柿祭の客へ残しとき

笠岡市 木山 遠二

輸送車に目をカッとあけ何も見ず
手術台を見おろし居たり大時計
ガンは無しとハッキリ妻の目が云った
瘦せたねと天使が笑い経過よし

大阪市 河井 庸佑

あげ足をとる性格を見ぬかれて
三次会落伍もせずについてくる

大阪府 谷沢 好祐

コンクリートの長屋を団地とか申し
先生の新札教室をひと廻り
筆不精へ返事の切手も入れておく
公約は料理見本の蠟細工

愛媛県 榎 紫光

人情の薄い都会へ行きたがり
上役をその上役が叱りに来

未亡人惜しまれながら老けてゆき

青森市 工藤 甲吉

薬瓶嘗て斗酒尚辞せざりき
病院へチンパの下駄で駈けつける
しあわせに育ち黒髪手に余り
サービスをするという唇赤く塗る

松江市 小林 孤呂二

餓鬼大将と思えぬ七五三の顔
やはり小都市すっぱり霧につつまれる
上役になると四円の年賀状
めめしい声となり選挙終盤戦

松江市 舟木 与根一

金返すときは靴音まで違い

三井炭坑事故

人命の噫々もぐらもちに似て悲し

豊中市 林 夢虹

青年の心よ大阪城の草に濃淡
山蔭に詩を詠む牛飼男あり
いつからか野菊人恋う草となり
思いきりぶつても呉れぬ夫にて

大阪市 今西 生薑

リクリかは知らぬが出ること多き秋
膏肓に似て訴訟さたまだ続き

大学でさばる要領だけおぼえ

栗飯にしようかと家計簿おどろかせ

京都市 室井 八九寸

釣り書へ名ある遠縁先きに書き
墨染めが紫衣に従う石畳

岡山県 横山 一声

自家用車買うて養子を探して居
貞操はいらないお金貯める趣味

小松市 関戸 宗太郎

事件記者酔うてはならぬコップ酒
外人を捕えて駐在もて余し

美祿市 安平 次弘道

コタツから返事三度目に立つ気配
月賦だけ残り車も人も逝き
身替りの獄から出たら組がなし

感情を殺し看護婦かいがいし

宇部市 平田 実男

物干しへ女世帯と云う下着
商魂は国体協賛などと売り
シグナルの通りに歩いていて轢かれ

大阪府 高橋 尚史

飛行機で帰れば日本も月丸し

国鉄のタイムアップが恐ろしい

諫早市 川岡 靈 眼 子

旅の宿

写すところないのでハミリ女中撮り

貝塚市 杉 本 一 鶴

計算された愛のひやかさ

看護婦まで金持のベットへへつらいぬ

三カ日病舎の留守居は僕がする

斗病十五年目に突入

娑婆とはかくまで遠きものなるか

テレビっ子味な真似するガンさばき

女患がにぎればノコまでくねくねす

富田林市 浅 川 八 郎

我が児をば親の孫とは思うてず

菊薫る四等国に落ちてなお

岸和田市 内 藤 き さ 子

職長に腕を買われた気ままぶり

美智子妃の胸に云うことなき真珠

立呑みへ閑な易者が顔を出し

餅まきの拾いようにもある勝気

夕方に来て折伏のせわしなさ

青森県 木 村 涼 人

夕月は詩吟を古いとは言わず

中秋の雨青空を拭いて去に

凄惨鶴見列車事故

原色でなくてよかったテレニュース

芦屋市 唐 崎 専 翁

物と心どちらも欲しい冬籠り

寒さにも追いつめられる甲斐性なし

倉吉市 奥 谷 弘 朗

お流れを受けて卑屈な小役人

小さな親切へ勇氣ともなわず

ウイंकで一家笑わす幼稚園

金が出来たら下役も遠慮せず

兵庫県 遠 山 可 住

捨てられて海まで行くかダッコちゃん

西日まだあたるあたりへ吊し柿

ここまでの予算道路がブツと切れ

兵庫県 河 原 み の る

乗り合いの中で神ン主だけが死に

砂あそび先ずはお墓をつくるなり

姫路市 隠 岐 不 酔

減税と言うて税吏の尻たたき

皇后もハンドバッグは御自身で

出雲市 中 川 晃 男

持病の胃会うたび医者は切りたがり

横文字は抱えるだけの通勤車

停年の近づく判も丸くへり

松江市 柳 楽 鶴 丸

成長が楽しみ赤字が苦にならず

スポーツが嫌い女房の太い足

京都市 都 倉 求 女

不景気になれば電話番号も気にいらず

子供等はダンブの強さに憧れる

チンドン屋ほども人立ちとまらない連呼

動物園みな服着てた答絵本では

兵庫県 大 江 秋 月

駅へ徒歩二分ちよいちよい乗り遅れ

新館へ案内された顔なじみ

大阪府 松 田 半 月

ひもつきと知らず女にもとを入れ

子は夜学ババはパチンコママ宵寝

稲刈りにトランジスター鳴っており

今治市 越 智 一 水

他人さんが日曜百姓ほめてくれ

台風後の新葉に親しめず



西木夢二郎氏

高木夢二郎を

語る

革新川柳陣営の一異彩

石原青竜刀

中
いのちの深き発止と男肉つ
きとどめ
死語発すをみな男肉の知る
深き
窓の陽に二つの裸体溶けて
ゆく

これはその中心的な作である
が、あとにのべる彼の現在の作品
を対照して、ほとんど別人の感が
ある。といつては彼は不服かもしれ
ないが、おそらく現在の彼には
向かない作品ではあるまいか。あ
るいは戦後の激動期における「な
んでも作ってやろう」といった一
試作であつたかもしれない。いま
さら、このような作品をあげつら
うことは彼にとつても迷惑である
かもしれないが、どう考えてもこ
の一連に高木夢二郎という作家の
存在は発見できない。多少の短詩
文芸手腕のある人なら誰でもやっ
てのけるだろうとおもわれるよう
な、アマイ七音の綴り方である。
余談になるが、戦後の一流行とし
て、若い川柳家の中にこれと似た
ような劇や映画などをテーマにし
た連作風のものを発表すること
が、いまも続いている。それは十
七音綴り方の練習にはなつても、
文芸（この場合川柳）作品として
は価値を認められない。すなわち
文芸作品の根本である作者の精神
から出発したものでないからであ
る。

一連の作を見るに及んで、彼に対
する多くの認識はあらためる必要
を感じさせられた。
曇る日を寡婦は生きてる風
便り
寡婦を置き去りにして自衛
論があり
血がうずく寡婦春宵の地を
抱く
胸だいて寡婦という名にせ
まく住み

これらの作品を読むについて
は、もちろん戦後のこの国の社
会ということを前提としてでなけ
ればならぬ。単なるいつの時代に
もある寡婦のことをうたったもの
でないことは「自衛論」の語によ
つても明らかであるが、そのよう
な時代の背景なしに、だいいちこ
のような発想が生まれるわけもな
いと言つても過言にはなるまい。

川柳非詩論にまっこうから反対し
て数回論争したことがある。その
後は一切ほととの間は没交渉とな
つたので、戦後彼から彼の戦後創
刊した柳誌「ちまた」を送られる
まで関心が無かつた。その作品傾
向についても全然知るところがな
かつたのだが、「ちまた」には次
のような作品があつた。

米々と 列を乱しいる淋み
し

原子力さて人間よ何処へゆ
く

悩んでる地球へ星が流れつ
ぐ

征服の手からこぼれている
痴情

日本人けものの肥える秋に
痩せ

一瞬の虚栄をあわれ乳パン
ド

これらの作品から見て、彼は上
記のように「米原」「影像」とい

った観念詩派に関係しながら、そ
れらと傾向が必ずしも同じでな
く、むしろ「川柳人」に近いので
ないかというような感じがある。
それでも昭和廿五年版「川柳年刊
句集」（しなの川柳社発行）を見
ると、
人——人 人に突き当た
り
人生る 思索の上にある星
座
詩を呼号凡愚まほろしに溺
れ
いったような「米原」的をほのか
に感じさせるものがある。さらに
昭和二十七年刊行の「現代川柳展
望」（しなの川柳社）には、その
頃の話題であつた「チャタレー夫
人」をテーマとした連作風の十句
を出している。
遂にをみな星ある宵に身を
ひらき
激情の肉がのたうつ「雨の

しかし「川柳人」三〇五号（昭
和二八、七）に発表した「寡婦」

高木夢二郎は多くの知るかぎり
では戦後はほとんど評論を発表して

いないので、現在の彼の川柳観がどんなものであるか、的確につかむことはできない。ただ彼の時々ひらめく断片的な意見によって判定すれば、「米原」系とおぼしき川柳詩観をもつと同時に、剣花坊系革新川柳に興味をもち、あわせて社会批判的リアリズムに関心し、かつ実践している。態度としては幅を広く、一方に偏することなく、あらゆる傾向を容認すること、一応反伝統的であることは、前記の経歴からそうだし、現代川柳作家連盟の創立以来の会員である点でも証明できよう。そして現在の作品傾向は主として社会批判的リアリズムであるとよくは見えている。これは戦前の源流についてはよくわからないのだが、戦後昭和二十三年十一月の「川柳人」(通巻二八四号)に、早くも次のような作品を出しているから

ブラカード喰っているから
餓死があり

ブラカードよくぞ悪口掻き
あつめ
遊んでも喰いたい願ひ
ブラカード

これらの作で見ると保守反動派の臭いがないでもないが、後は必ずしもいわゆる保守反動派ではなく、むしろ中正派というべきではないかとぼくは見る。前掲「寡婦」作品以後昭和三十年十二月の「川柳人」には次のような作品を見せている。

精農とレッテルを貼り
上げ

アメリカへへっぴり腰で馬
鹿野郎

ケッタイナ同じ平和で食い
違ひ

このような傾向は彼が教職を退き、永年の北海道生活に終止符を打って上京し但し(住所は神奈川県)、剣花坊の遺産「川柳人」の編集に献身するにいたってから、いよいよ彼の作品の主体的性格を形づくるようになったのではないかと見られる。

地球包切みれないフルシヨ
フの喪服

食っているから赤旗を派手に振り

瀟々する無学 道德論上梓

雲の墓標 核兵器を積む

黒布の亡霊 フラフラ渡る二重橋

遮断機の向こうで原子核が待ち

ムード 追かけ日本頓死

公選法また札束の順に負け

法治国札束偽卵を産みつつ

け

キリストガついに敗れる

原子の火

議事堂に猥談はすむ日の母

子心中

選挙泥濘 一步前進 二歩真実

が後退

選挙泥濘層を堀りに今日も

出かけ

憲法の装飾日の丸星条旗と

交差

大東京地球をつつむニセ証
紙の顔

人造りの最中に偽証紙をパ
ラ撤く

これらは最近の彼の発表作品の
中から抜いてみたのだが、もちろ
んこのようなものばかりではな
く、

古時計捲けば捲くほど狂う

針

人間檻樓いつわらず耐に昇

天

不壊の球くたく幻想非処女

肯定す

あせつてる星座にひとり言

つづく

無抵抗という儚なさも生き

る道

陰影の裸婦を描く蒼い空

といったような心象的な作品

も、みぎにあげた作品と同時に発

表されている。しかし前記したよ

うに社会批判的リアリズムに、最

近の夢二郎作品の主体があるとい

うほくの判定は的外ではないな

いと信じる。いさか我田引水の

きらいがあるかもしれないが、こ

の傾向は前にも書いたようにほく

の志向する諷刺に通ずるものがあ

り、川柳の本筋をゆくものとし

て、大いに人意を強ようするしだ

いである。「米原」の象牙の塔か

らよくそこまで脱け出したもの

だと、ほくはひそかに彼のために

祝福している。

人あるいは高木夢二郎の作家と

しての常識性を指摘し、飛躍の乏

しさを言うかもしれない。なるほ

ど彼の作品にはいわゆる名作家の

ような才気走ったもの、あるいは

うまい句とて人をうならせるよ

うなものあまり見られないが、

それは性分からくるもので、ここ

にも「文は人なり」という語の真

実性をおもわざるをえない。しか

し、そのような彼が、みぎのよう

な作品傾向に進んだことは、永い

川柳遍歴の結果、ようやくそこに

彼自身のベースを見出したもので

はないかと考えられないこともな

い。あるいは彼自身としては承認

しないかもしれないが、ほくの主

張においては、社会批判に必要な

ものは、才気でもなく「うまい」

句でもない。必要なのは作者の精

神である。さらに言えば在来的な

「詩」でもない。高木夢二郎とい

う一社会人が、現代に生活してい

く上に、心頭を去来するさまざまな

な想念を、批判精神によって短詩

文芸化するばよのであって、そこ

にリッパな夢二郎作品としての存

在理由があるとおもう。ほくの希

望するところは、それを彼のベ

ースとして決意し、それに向かっ

て今後の努力をかたむけつつして

いきたいということである。前記

したように川柳観について幅広い

態度を持ち、一方向にかたよるこ

とをきらう彼の主義は、「川柳

人」編集主幹として、また後輩に

対する指導者としては、しごくけ

つこうなことであるが、一個の作

家としてはあくまで一本の「自か

らたのむところ」のものをもちつ

べきであると考ええる。

作家という問題を別として「川

柳家」としての高木夢二郎の存在

はいまやまさに一方の重鎮であ

る。剣花坊在世時代はその門下で

もなく、戦後の「川柳人」に對し

て一同人にすぎなかった彼が、教

職を退いて上京の後、一念発起し

て当時中島国夫の病氣により危た

いにひん受けていた「川柳人」の編

集を引き受けたことが、彼のため

に川柳家としての「第二の出発」

ではなかったかとおもわれる。そ

れ以来の活躍はめざましく、ため

に「川柳人」の発行も軌道に乗っ

て、ほとんど月刊を確保するよう

になった。柳界のありかたが以前

と異なっているので、剣花坊在世時

代の「川柳人」と比べて論ずるこ

とは当をえないとおもうが、高木

夢二郎を主幹とする現在の「川柳

人」は剣花坊の遺産から、生々流

転的に新生したものともしようべき

面目を備え、新しき時代をになう

べく希望がもたれている。これは

一に彼の不老の熱情と、円転滑脱

的な人格がそうさせたものとお

もう。たしかに彼は健康にも恵ま

れているのだが、齢古稀に近くし

て不老である。毅然たる一本の筋

は保っているのだが、人に接して

は春風たいとうのおもむきがあ

る。そしていわゆる「先生」(川

柳の)といった気構えがみじんも

なく、若い連中と一つにときあ

つていく。「現川連」ではおそらく

最長老であろうが、それと別に彼

は革新川柳陣営の一異彩というこ

とができるとおもう。

(一九六三、一〇)



写真説明— 左から 栗・摩太郎・吉井堂・薫風子・多志志・文蔵・梅里の諸氏

運轉免許は

パスしたか

座談会

(竜 昭)

を準特選に選んだが、一般の気持がこれだろう。「川柳雑誌」の句にも自動車が好きというものが圧倒的に多い。そして、頭金だけの車が走ってる

薫風子「マイカー・ブームで明け暮れた一九六三年でしたが、名ドライバーの皆さん方に愉快な自動車談義をして戴こうとお集り願ったのです。まず多志志さんからどうぞ。

多志志「昔は先ず家を持つということが理想だったが、今では借家住いでも自動車を手軽に持つ。昨秋の大阪文化祭川柳大会で、

自家用車こどもも同じ夢を持ち

主井堂「昭和十二年頃だったか、

薫「少し往時の思い出話などを。

返し続けていると見ていいでしょう。

ろではなく、毎日至る所で事故が

支那事変勃発の年に初めてオースチンのワイヤースポーク箱形の四人乗りを買った。当時何ごとでも尖端をゆく医者がよくこの型の自動車を愛用していたが、私はそれを駆って鮎の解禁日に釣りに行ったところ、新聞に写真入りで、非常時に非常識だと大きく出された。又、その後釣堀りへもその車で行ったが、今度は釣堀りの親爺が、うちのお客に舶来の自家用車で来るのがあると、これまた宣伝に使われた。それ以来、釣りに自家用車はタブーになっている。

摩太郎「亡くなった高橋かはる氏の句に、

大阪は轢かれかけてもよいところ

今では「轢かれかけても」どころではなく、毎日至る所で事故が

あり、今昔の感が深い。

栗「その句は、当時の模様から考えると電車に轢かれかけるということでしょう。われわれ子供の中には、外へ飛び出すと、「自転車に気イ付けや」といわれた時代やから。

文蔵「そやな、それは電車、市電のことやろな。

多「交通事故で死ねば阿呆かいな」といわれ

(久米雄)

交通禍犬もうっかりしておれず

(八 歩)

というのがある。摩太郎さんの挙げられた句とは反対のこと、大阪の現状をいうた例句です。

薫「月賦で手軽に買えるようになったというが、どれ位の価格ですか。

多「国産で九拾万円から百万円です。現在日本は、米英独伊に次ぐ自動車国です。

主「全く隔世の感ですよ。昭和五、六年頃でシボレーの新型が二千五百四十円でした。

多「二千五百四十円というたら今の子供の玩具の自動車の値段がそれです。

主「その時分の円タクで、大阪湊町から甲子園へ中等野球を見にゆくの、五人相乗りで一円。一人二十銭の割りでした。安かったですね。

謹 賀 新 春

南区医師会文化部

杏林川柳会

河村 瑞 川

中島生々庵

中島 小 石

平尾 太希志

福井野迷路

牟田 一 哲

安岡 珊枝郎

山川 阿 茶

西 尾 栞

八尾市八尾木八七一

杉 原 愛 鳩

竹原市竹原町新町

川柳「たけはら」一同

代表 山 内 静 水

渡 辺 暁 童

愛媛県越智郡吉海町仁江

葉二その頃は一台追い抜くと、五錢乃至十錢のチップを出したもんや。

葉二やはりその時代にもスピードを牽しんだ訳ですね。

文四四ツ橋で芸者の乗った田タクがひっくりかえって死んだという事故があり、新聞で大きく扱われた。自動車事故など少なかったからね。

葉二懐旧談はこれ位で。

自動車学校ババは平気で落第し

(宗太郎)

という句がありますが、免許証取得までの苦心談を皆さんから。

葉二昭和三十七年十月十六日に運転の資格が出来たが、費用は合計で二万三千円程でした。

葉二一昨年のことですね。

葉二ええ。学課は一べんに通ったが実地ですべった。家へ帰って話すた女房は、「よう落としてくれはった。あんたはんみたいなお人が街へ出たら危うて仕様がない」といいますのや。

多二はだか随筆の佐藤弘人さんが六十才で初めて免許をとられた時の話も同じようなもので、奥さんから、「私を離縁してから免許をとって下さい」といわれたそうです。

葉二私は兵隊では輜重兵で、乗馬が専門だったんです。馬はバック

する場合、右の手綱を引くと左へ行き、左の手綱を引くと右へバックするので。長年のその癖が身についているので、自動車も同じ乗物やと思うたのがそもそもの間違いで、自動車はバックの時も、右へハンドルを回すと正直に右へ行きよる。癖とは恐ろしいものですな。教官に何んべんも叱られたが、直らずに第一回はこのバックのところで落第という次第。(一同爆笑)

文四バック・オーライやなかった

座談会の人々

司会 橋高薫風子

西尾 葉
若本 多志

松江 梅里

土井 文蝶

吉田 圭井堂

八木 摩天郎

た。(笑)

葉二二度目にはすっと通った。

多二それは成績上々の方ですよ。

普通の人は七・八回から十回位でないと実地はとれないから、運動神経が凄く良いのですな。

葉二運動神経が良うて合格をしはしたが、肝心な度胸が無うて、運

転が恐い。どうしても恐い。今まで運転したのはたった二度だけです。(爆笑)

葉二運動神経の問題など年令に随分関係があるでしょうね。

多二免許証の取得の早い遅いに年令はあまり関係ないようです。若くても運動神経の鈍いのはやはり遅くて。

(この時梅里氏出席)

摩二私の会社の自動車修繕専門の若い者らは運転の方はいつも車を扱い慣れているので、すぐ通るが、学課が仲々うまく行かない。葉二そこで学課受験の上での何か失敗談を。

多二学課じゃないが適正検査での失敗が私にあります。実地第一回では上り気味で失敗したので、二回目の時は落着かんといかんというのでアトラキシンを飲んで行った。ところが普通より倍以上の量を服んだので効果観面、やはり落着くね。コースの試験は見事パス。それで適正検査ということになり、背後から検査官が時計を近付けて来てどちらの方向に音がするかと問われることになった。これが、薬が効き過ぎて神経が麻痺したのか小さな時計の音が皆目聞えない。検査官は、どちらどちらというが、どちらの手を挙げてよいか判らぬ。ああ、これで又すべ

ったなと観念したが、結果はバックミラーを二個以上つけた車なら運転を許すという条件付きで合格になった。(笑)

梅二私は四年半になります。受験グループ三十名程のうち女性が半数でした。ハンドルを握った第一日に、教官が添乗していたが、練習用コースの踏切にいきなりぶっつけてしまった。教官がブレーキを踏むまもなく、教官がブレーキを踏むまで、逆も凄かったわけ。一般に男より女の方がどんくさく(運動神経の鈍いこと)、どんくさい女の人四人とどんくさい男の私一人が特別教室みたいな方へ入れられ、特別教育用の千円のチケットを三千円も買わされたりして鍛えられたのです。暑い時で腹が減るわ、蚊に食われるは、全く涙が出ました。それでも最低百六十点取らんて落ちるのに、百四十点より上がらん。そんな状態で試験の日を迎えたのです。この日は、日頃信心している金光教の剣先のお札を、まるで荒木又右エ門みたいに額に戴き、白鉢巻をして頑張った。真剣勝負そのものやった。教官も落第を保証してくれる状態やったもんで、大いに同情してくれて、試験官が草臥れて一息つく昼飯前になるようシードしてくれて。それが試験の開始時間が四十

長野県湯田中温泉

中島紫痴郎

電話二〇一七番

河野春三

大阪市此花区

春日出町三一九

川村好郎

大阪府泉北郡

高石町北四六五

明和研究会

小浜牧人

菱田満秋

橋高薫風

野呂鵜汀

樋口舟子

吉本菁

林本夢

河相す、

月虹風遊子秋人

分程遅れたので、私は昼食後の第一番、試験官が最も緊張しよる時になってしまった。(笑) そこで、先にいうた荒木又右エ門の運転になったのだが、これが凄くうまく行く。いつもガクガクする上り勾配も雲の流れる如くで、減点はたった五つの百九十五点。筆記試験も奇跡的に二百点満点で、ど

んくさいおっさんの異名をとって女の中に入れられて、特別にしばらく免状をもらうことになってしまった。自動車学校開校以来の不思議な卒業生として今に語り草になってるのです。(笑)

薫熱そのもので獲得された免許という訳ですね。熱心は往々喜劇となりますが、当時の梅里さんと思うと笑えぬ気持です。

免許証夫人の方が早くとり

(方大)の句のように女流ドライバーも増えましたが……

主日女流ドライバーが増えたが、これも女の習性で、信号待ちにバックミラーにうつり自分の顔をうつしとる。何や遅いモタモタした車やなブ思ふたら、それは女流ドライバーの車ですわ。(笑)

摩りうちの修理工場へ女医の奥さんが運転して当てられた車を修繕に、主人には内緒で早くしてくれ

とやって来られた。それを修理した工員が、以来懇意にもらって、病気になる時今度はその女医さんに診てもらったという話があります。

多日そんな時の修理代は沢山に貰える？ (笑) 摩りこの頃は嫁入りの道具の一つに自動車

をというのもチョクチヨクあります。電気冷蔵庫庫・テレビ洗濯機が三種の神器

といわれた時代から又一段と躍進したんです

多日私も花嫁道具としての自動車を数台売りました。

嫁入りの道具にダットサンが売れ

反が一回、皆、三千円から五千円という罰金と、二十日の運転停止。法規講習をうけて一週間期間を短縮してもらったが……。これで今までよう生きてられたと思えますわ。それで慎重な運転をしていたら、名神高速道路で警官に笛を吹かれて、びっくりして停車し

たことがありますが。

多日金沢へドライブした時、車に

と詠みました。

薫り何か運転中にドキリッときれたことがありますが。

多日私は八年以下にもなるが、無事故無違反です。相当なスピードを出して走ることもあります。

運よく一度もひかなかったことがありません。一人でなく身内の者を乗せたりする場合には慎重に走ります。

時速四〇今日は女房を乗せており

と詠みました。

多日金沢へドライブした時、車に

と詠みました。

多日私は八年以下にもなるが、無事故無違反です。相当なスピードを出して走ることもあります。



剣先さのお札をカシラにいただき免許受給と取つ組んだ梅里さん

岩崎愛二

京都府乙訓郡長岡町
梅ヶ丘二丁目三十八番地
電話京都(92)二九七四番

魚住満潮

大阪市西成区玉出本通四ノ六

富士野鞍馬

東京都港区麻布
宮下町三〇番地の二

部

交

川

淀

雜

川

大

阪

市

東

淀

区

八

条

町

一

ノ

二

西森花村

坂田東洋男

志水礼司

早川清生

平田三十郎

小島孝夫

中村瑞歩

木村水洞

岸和田市野田町一七五

高橋操子

電話岸和田貝塚(2)六六三二

ルを握ることは若返り法の一つです。人間の神経が六万程あるそうだが、車の運転により神経の柔軟性をいつまでも失わず健康にも良いとつくづく思います。普通、素人の観点からすれば、老人になって神経を使うことは、血圧も上るし毒ではないかと忠告してくれるむきもありますが、ハンドルを持つてゐる時は、商売のこと、手形のことを忘れて頭脳を使うことをしないでゐる訳ですから気が休まるのです。というのは、私がハンドル持ち出して約一年もしないうちに、社員の連中が、事務的に若い愛人でも出来たのではないかという程でした。又、ファイトも湧きますね。社員を叱るのも激しくなっているようです。自分では意識はありませんが、皆認めてます。私は七十才位までは運転するつもりです。薫風子君は運転免許持っているの？

薫風子 若いのに自動車の魅力を感じません。自動車より乗馬の方が余程好きです。自動車に乗りスピードを楽しむ分には人並の関心はあるのですが、自動車運転には自動車を機械として扱う面白さ、操作の醍醐味も加味されている訳なのでしよう。小供のとき、遊園地で電気自動車を運転した時のよう

な心のはずみ、そういうものが現在にはなくなっているようです。一口にいうと機械嫌いなのでしよう。あんなゴツイものを、ゴツゴツと操作するのかわかるだに気がくじけてしまいます。交通美德ということがいわれていますが……。

圭二 一週間の前、私達夫婦は秋芳台から湯本温泉に行ったのです。その時、千七百円でタクシイを交渉して乗り、地道を湯本温泉へ向って走ったのですが、一台の小型トラックが前を走っていて、いくら警笛を鳴らしても約十五杆程というものは避けてくれな

い。警笛の鳴らし続けに、遂に相手が根負けして譲った途端に、タクシイの運転手が急停車して飛降り、小型トラックの運転手に「貴様、交通美德を知らんのか。こちらが空車なら幾ら邪魔をしてもかまわんが、お客を乗せているんだ。客にすれば山口県人は実に薄情ではないかと思うではないか。山口県の恥と思え」と物凄く怒ったのです。この運転手の態度は立派でした。交通美德は是非守って欲しいものだし、譲り合いの精神が肝要ですね。

文二 前の車は土建屋のトラックやだったので、どけんなんだのや。

薫風子 乗用車の後部に、「運転初心者だから、よろしく」とか、「遠慮なくお先へどうぞ」などと書いたトラックとかがあつてユーモラスなものもあります。法規も度々変更になったりしてややこしいのでしよう。

多二 この頃は自動車の取締りは禁止禁止一点張りで、どうかと思います。

自家用が不便なものと気がついた

(圭井堂)

の句もそういう事情をいついて

文二 駐車禁止もひどいもので、天が下置きどころなし自家用車という句の通りです。

薫風子 私の店の方でも、ハイヤーを呼んで、家の前まで来てもらつてから、客がグズグズしていると、後から後から自動車が詰めかけて混むので、そこらを一週廻つて来てくれという。一廻りしても、まだ客が腰を上げない。もう二、三廻廻らせると面白現象が度々なのです。

多二 それを「水すまし」というんです。(笑) いみじくもいったものです。今はガソリン代よりパーキング代が高くつく。以前はアメリカの話だと思つて聞いていたのが身近なことになってしまった。

薫風子 一つ、ナンバー・プレートのことについて。一五六四などという番号などはヒトゴロシと読まれますから嫌われることではないか。

文二 何でも思ひよう取りようで、その番号でも(以後無用)と読んでおいたら良い訳やな。

圭二 私はそれを気にする性で、私のは八八〇〇です。9や4のある番号を避けます。

多二 そういう客が販売店泣かせで、ご希望の番号を受けるためには、セールスマンが半日以上も費さねばならないのですよ。中にはエンジン番号から、サービス券の番号まで4や9があると駄目を出す人がいます。併し、反面、良い番号を取つてあげて一台余分に売つたという話もあります。宝塚歌劇団におられた寿美花代さんに買つて戴いた時のエピソードですが、す3874(スミハナヨ)の番号を取つて持参したところ、大いに喜んでいただけたのです。

梅二 商売はアイデア一つですなあ。

薫風子 最後に、皆さん、交通法規を守り、遵法運転をして下さい。切にこうお願いをして、では、この辺で。ありがとうございますまし

だ。

山田 季 賛 山田 ス ミ 子 大阪府高槻市西五百住三 五ノ四七幹線アパートB 一〇二	林 野 魁 光 吳市吉浦中町一丁目	大坂市阿倍野区王子町三ノ三四 菊 沢 小 松 園 電話 四六六四四番	西 川 晃 大坂市西成区東入船町二	桜 川 不 水 下関市東大坪四町十八ノ十一	大阪通信病院 大 阪 通 信 病 院 烏 ヶ 辻 川 柳 会	会長 足立春雄 幹本 藤 児 若林 草 右 田 中 敏 行 市場 没 食 子 中 谷 ハ ナ 子 西 辻 竹 青 水 谷 竹 莊 西 口 竹 志 木 村 よ し を 古 谷 ま さ 重 田 安 紀 子 生 越 正 徳 客 員 北 川 春 巢 銭 谷 か お り 半 田 夏 生 幹 事 小 沢 史 葉 堀 風 仙 洞 森 下 愛 論 会 計 橋 本 幸 男
--	---------------------------------	---	---------------------------------	-------------------------------------	---	--

川傍柳初篇研究 (十)



氏府十丸

92 晴天の棧敷女ッきれハなし

一甫

清「晴天十日」という言葉があり、これは、当時の角力興業の日数。さて、角力興業中の力士は、女色をつつしんだので、女ッきれがなかったわけである。

藤井「昔の角力は、雨の日はとれなかった。だから、雨の日は芝居が繁盛し、晴れの日は角力が繁盛した。その晴れた日の芝居の棧敷の有様ではないか。

川端「単に角力棧敷の句と思うが……、

前田「この『棧敷』は、山王祭・神田祭等の神輿見物の棧敷ではないか？ 晴天なので、祭は大にぎわい。だから、女連は馳走づくりに多忙で、棧敷には女ッ気はない。と解したい。

岡崎「小生は川端説。少し時代がずれるが『江戸繁昌記』に『明和の間、婦人相撲大に行なわる』とある。そんな女角力の棧敷ではないか。

高須「前田説も面白いが、川端説ではないかな。

丸「川端説でよい。晴天十日間の角力棧敷、芝居とちがって、女は見物に来ぬ。

岡田「角力棧敷には違いないが、女が見に来ないのではなく、昔は女には角力は見せなかったのだ。(丸先生、こんなことは先刻ご存じの筈。角力言葉でいえば『取りこぼしですか？』)

女ひでりは晴天の十日なり

(タル四〇二三)

これさえわかれば、句意はおのずから明瞭。だが、もとは晴天八日興行だった。それが、安永七年から晴天十日になった。と太田南畝の『半日閑話』に書いてある。

船頭は男ばかりを八日漕ぎ

(タル五四二)

勸進相撲は、本所回向院でやったので、江戸市民は渡舟で大川を渡ったのである。93 ちっと居ないと棧校はあの人や

丸 十 府 高須啞三味
岡 田 甫 前 田 喜代人
川 端 柳 風 岡 崎 重義
藤 井 和 雄 清 博 美

眠 狐

清「『棧校』は、盲人の最高位だが、この句は解けぬ。

藤井「盲人だから疑い深く、ちよつとでもないとい、すぐ『あの人』と言う。もちろん、自分の女房。棧校ともなると、高官だから、言葉使いも上品で『あの人や』などと言ったのであろう。

川端「賛。盲人の邪推。

高須「この頁、佳句もあるが、難解句も多い。『あの人や』が、わからない。

前田・岡崎「わからない。

丸「藤井説でよい。『ちんがはえとと女房を先ずさぐり』(タル一九七)なんていう句もある。

岡田「賛。不具ゆえの劣等感と邪推。

94 はやり医者すでに無刀で出る所

一甫

清「僧侶の遊里通い。ただし、僧侶は客にはなれぬ。そこで、法体の医者にはばけて行く。『すでに』は『すんでの所』で『ついうっかり』と解し、馴れぬことなので、ついお腹の物を忘れる所であった。という句であろう。医者は一本刀を許されていた。

藤井「『はやり医者』だから、僧侶ではなく、医者だが、東奔西走、それ往診と、あわてて飛び出して、刀を差し忘れる所だったと、素直に解したい。

川端「それでよいであろう。

高須「『流行医』と、のっけに説明しているから、間違いない。すなわち『はやり医者』だから、ナリカタチなどにはこだわらぬ。まして物の役に立たぬ腰の物など、邪魔たらしく不要なので、注意されて、しょうことなしに差して出る。

前田「賛。『すでに』がうまい。

岡崎「藤井説に高須説が加わって、言うところなし。

丸「賛。ただし、この『出る』は、自宅を出るのでなく、カゴを出るのであろう。

岡田「場所の治定は困難。自家・カゴ・患者、どこかは決められぬ。高須説のごとく、流行医大忙しの情景。

95 乗り合てひそひそ嫌ハ評をされ

眠 狐

清「渡し舟に乗った花嫁。乗りあわせれた相客に『ひそひそ』批評される。今も昔も人の心が変わりはない。

藤井「今ならさしずめバスの中の風景。

川端「『乗り合』は、芝居の向う棧敷の前端の席のことで、俗に『大向う』の最前列だから、とくによく目立つ。それで、幕間などにひそひそささやかれている、と

いう句であらう。

高須「礎稿でよいのではないか。いかにも「新妻」らしい恰好でいるのは、里婦りか何かであらう。

前田・岡崎「我等も礎稿でよいと思う。

丸「東慶寺へ駆け込もうと、家を出て逃げた嫁が、六郷川の船渡しの場合であらう。「連れのある様子も見えないし……」

「旅支度もしていないが……」「大師参りとも見えないようだが」「うんそうか、鎌倉の縁切寺行きか」「あんな、おとなしそうな顔での……」「気は強いんだろうよ」等々、本人の気持ちも知らず、乗合の人たちはひそひそと臆測している。

岡田「小生も、礎稿のように解していたが、丸説を聞いては、六郷の渡しと取れぬこともない。

(6ウ)

96 大きな口で一ッ国を蹴ハい、

眠 狐

藤井「大きな口」とは自慢話の事、「一ッ国」とは自分の生国の事で、他に何も自慢する事もないので「私の国では」とさかんに自慢している事と思う。

川端「一ッ国」は「一刻」とも書き、我儘な事、「大きな口」では、釣合のとれない顔で、我儘ばかり言う嫁は、恐らく持参金嫁であらう。

高須「一ッ国」は川端説通り「一刻」の事で、頑固な事だが、古川柳にはこういうアテ字があるから、判りにくい。「大きな口」は嫁の人相で、一刻を言う嫁が、大きな口に見えるのである。

前田・岡崎「川端・高須説に賛。

清「賛。但し「大きな口」は、人相と同時に「大口を叩く」意味も含まれていると考えられる。類句に

値百両一國をぬかずなり

(タル二四)

と持参金つきの嫁の句がある。

丸「諸説に尽く。

岡田「高須兄よ「一刻」は「一国」とも書くのです。元の辞書には、みな出ています。大きな口を叩くのは、持参嫁と限定して可。その持参嫁、出ッ歯で、歯茎あらわれ、顔全体が口のように見える人相の女なり。

藤井「一ッ国」が「一刻」とわかり、赤面。

高須「言海」を見たら「いっこく」とは「頑なに、他の説を容れぬこと」(「一国一城を」とさして、他と交らぬ意に起こる)とあり、アテ字説撤回。

97 のぼるべからずへ駕かきもたれてる

同

藤井「凭れている(より)かかっている」も垂れている。(小便)と二通り解される。

垂れているとなると「も」があるから、客と複数になり「つれ小便」となる。お客の注文を受けて、堤ばたで停止、駕から下りた客は「登るべからず」の立札を見ながら用をたす。それを見て、駕かきも尿意を催し、つれ小便となった、と解したい。もちろん遊び客である。

川端「なるほど「のぼるべからず」で、小便無用とは書いてない。

高須「ボクは「凭れ」説をとる。「のぼるべからず」の立札によりかかって(と言うことは、楽な姿勢で)客のつくのを待っている辻カゴの姿と見たい。

前田「のぼるべからず」は、土手の類ではない。火の見ヤグラの梯子である。

「町役人の外登るべからず」の板札が打ちつけてある。高須説の通り、そこで客を待っている、駕かき風景である。

はえぬきの階子の側で駕イ、

(傍一四三)

半鐘の下で四ツ手にひらり乗り

(〃四七)

半鐘が落ちると四ツ手みじん也

(宮三三三)

岡崎・清「高須・前田説に賛。

丸「前田説明解。例句から、辻カゴは多く火の見ヤグラ下などで客待ちしていたことが知られる。

岡田「その通り、火の見ヤグラが、大辻カゴのいる目印となっていた。

98 柿の皮むいて十六日に出る

龜 遊

藤井「当時、酒屋の奉公人は、柿衣(かきそ)という染めの上ツ張りを着ていた。従って、簀入りの十六日には、その従業員をぬいで、暗衣を着てイソインと出て行く。そういう奉公人の姿である。

八年の年季で柿の仕着せなり

川端「賛。簀入りは、正月と七月の十六日で、三日の暇が出された。

高須「何でもない事を、特に判りにくく言う、というような傾向はないか。

前田・岡崎・清「礎解に賛。

丸「当時としては平明な句。

岡田「その通り、別にむずかしく言おうとしたわけでもあるまい。

99 髪を出す内へつついをつかみ出し

五 鶴

藤井「不解、御教示乞う。

川端「髪を出す」とは「髪切」のことか? 全然わからぬ。

高須「お内儀の髪結う傍で、幼児のいたずらしている情景ではないか。

前田「髪を出す」は、髪をいう時に両側の髪をふくらませるために、髪を出すことで、そうしているうちに、次のオハグロをつけるために「へつつい」の用意をするのではなからうか。

へつついの前へこんで下女がかね

(タル一八三)

の句から推解したのだが、面白くするため「つかみ出し」と表現したと見たい。

岡崎・清「わからない。

丸「判りそうで判らぬ句。自分も大体前田氏の如く解しているが、どうも納得できぬ。すなわち朝の身じまいに、へつついにお歯黒を掛けて、髪を出す(丸鬚のピンは、就寝の際につぶしておく)その間にお歯黒がわいて来るので、片手で先の壺をつかみ出す、と解しているが、それだと「へつつい」でなく「へつついから」でなければならず、未解である。

岡田「難解句の一つだが、小生はこれを下女の句と解している。そもそも「へつつい」は、黒塗りにしてない場合は、白塗り

のものはもちろん煙ですすける。下女が髪を結うのには、へっつい前で、飯釜に火を焚きつけながらであるが、へっつい同様うすぐもりした鏡を取り出して……と解している。それ以外には、どうしても適解が得られぬ。丸先生いかが？

丸 御明解。下女なればこそ「へっつい」の端的な表現も生きているというもの。

100 九月蚊屋女房への字へてんを打

鯉 丈

藤井 九月に入ると、蚊帳の四隅に雁の画をかくか、その形に切り抜いた紙を貼る習慣があった。女房は画が下手なので、雁の略図としてへの字を書き、それへ点を打ったという句だが、その点が何を意味するか判らぬ。質流れよけのマジナイか？ 錨を書いたという川柳もあったと思うが。

川端 への字の上へ点をつけると雁に見えるから、下手の略図を、そう表現したのであろう。

高須 其の通り、雁の列んで飛ぶさまをへへと書たのだが、頭の位置を示すために、そのへの上へ点を打ったのである。

前田 九月蚊帳はつらないものとされていたが、つる場合は四隅に雁の絵をかいたのである。質流れよけではない。

岡崎・清 諸説に賛。

丸 これには類句も沢山ある。

お袋はぶきな姿に雁を書き

(タル 12)

九月蚊帳女房いかりを書いてつけ

(タル 25)

このイカリも雁の略図だが、そのイカリ

をふしだらな亭主野郎のための、質流れよけの意をふくめたと、勘ぐることも出来そうである。

岡田 諸説に尽く。なお、九月蚊帳については、拙著「末詳釈」に詳説してある。御参照ありまし。

101 玄関へ通して置て鑑ぬき

一 甫

藤井 先祖伝来の鑑を虫干しに出し、それを着込んで得意になっている時、客が来た。内は取り乱れている。一応玄関へ通しておき(玄関というからには、町家ではないと判る)大急ぎで鑑をぬいでいる情景であらう。

川端 虫干しの句に間違いない。

武者一人叱られて土用干し

で、米客にあわてている主人である。

高須 玄関へ通して置いて鑑ぬきで別に疑問のない句と思う。

前田・岡崎・清 賛。

丸 全く疑問の余地なし。

岡田 土用干しのために出したものを、ふざけて着て見た句で、川端君の「武者一人」のはか同想句は沢山ある。

102 座敷が無いで里扶持が滞り

門 柳

藤井 判らぬ。御教示をう。

川端 「里扶持」は、里子に出す養育費のこと。子のために苦界に身を置いたが、身体でも悪いのか、座敷も持てず、養育費も停滞し、里親に邪険に扱われていはいしな

いかと、気を使っている句であらう。

高須 里子のための苦界ではない。踊り子

が子を産んで、里子へ出した。しかし、お座敷がなければ、踊り子の収入はない。それで、里へ渡す扶持が滞り勝ちになる、という句である。

前田・岡崎・清 高須説に賛。

丸 高須さん明解。文句なし。

岡田 高須説通り踊り子。——余計事ながら、当時の里扶持というのは、月に二分二百文が相場であった。この子持ち芸者、かなりの年増であらう。お座敷がないとは気の毒千万。一度ころべば、二分は拾えるのね。阿々。

藤井 高須説で了解。多謝。

103 かるたの助言はからさく

一 甫

藤井 説明の要もなからう。本人も助け人も一生懸命の様子が見えるようだ。

古歌を百よんでしまふと畳なり

川端 歌かるた賛。助言者は、川柳の場合男が生酔いが多い。だから、助言される方もうるさがる。

二階へは膳の出ている百人一首

(タル 2814)

百とるに上下を着てはいまわり

(タル 234 三四二)

高須 助言者が「これからさく」と力をつけているのだが、自分の力でどうにもならないのが、おかしい句である。

前田 「かるた」は歌カルタではなく、ウンスンかるたであらう。オランダのカルタを日本流にしたもので、五種各十五枚総数七十五枚だったものが、のち四十八枚に変化したと言われる。

かるたの絵わが敷島の道ならで

(タル 236)

岡崎 いずれにしろ、カルタ遊びで、形勢悪く、負けこんでいるところであらう。

清 かるたは、やはり「歌かるた」と思う。かるたの句は、嫁や下女が多い。それで、助言しているのは男で、好きな女に助言しているのは、キゲン取りと解したい。

丸 「助言」とあるので、歌カルタではない。読みガルト説をとる。

岡田 単なる歌カルタ取りでなく、前田・丸両氏の言う通り、賭博のよみガルトである。負け込んでしほんでる男に、「これからさく」と助言するのである。

104 訛言の帰りおつけをあっためや

燕 子

藤井 訛言も難航したらしく、だいぶ時間がかかって帰った。丁度食事時だったので、やれやれさアおつけをあっためろ、と言う所か？ もちろん客の帰った後、しびれをきらしたその家の主人が、女房に言った言葉であらう。

川端 放蕩息子子の記びがかなえられて、家へ帰ると、そこは親馬鹿で「腹がすいたろう、早くおつけをあっためなさい」と言う。それだけの句と思う。

高須 句そのものは判るのだが「訛言の帰り」という表現が、どうも気になる。

前田 「訛言」の対象は、放蕩息子と限定する必要はないと思うが、やはり「帰り」がひっかかる。

岡崎 朝帰りのどら息子が、親父につかまって、朝飯も食わされずの強意見。みか

ねた母親が、こっそり呼んだ出入りの親方のとりなしで、訛言もかない、どうやら落着。その親方が、役目をすまさせての帰りしな、お汁を温めてもらって飯を食べな、と声をかけたところと見たい。

清川諸説に納得ゆかず。「訛言」に、何か特別の意味はないか。

丸川岡崎説に賛。だが母親が、自分で父親の部屋へ行って、とりなしたと見たい。それで父親もおさまったので、部屋からの帰りに、台所の女中へ「おつけをあっためや」と声をかけたのである。

以後をたしなめておつけをあっためるは母親自身の意見である。

岡田川放蕩息子朝婦り賛。カンカンに怒っている親父に、伯父御あたりがやっと詫びて、その場をとりおさめ、帰りしなに「おつけを温めて、飯を出してやれ」と、気をきかせたところである。

丸川「あっためや」の語勢に、女性らしさを感じるの、やはり母親と見たい。

(7才)

105 めしにあやかりなんすなと子を愛し

鯉丈

川端川「めし」一家の主人。「あやかる」は似通うこと。「なんす」は吉原で遊ぶが使う言葉で、いわゆる里言葉。

吉原で知り合い、相思相愛となり、年期が明けたか、身受けされてか、夫婦となり子供が出来てみると「お父さんみたいに遊んでは駄目よ」と、子をあやしているが、里言葉が残っている所に、両親の過去と、

子に対する愛情が想像されて面白い。

俺に似よ俺に似るなと子と思いの路郎先生の句も思い出される。いつの世も変わらぬ親心。

高須川「子を愛し」は「子供をあやし」で、何かの都合で、子供を伴れて、吉原に遊びに来た客の子を「お父さんに似ては駄目ですよ」と、遊女があやしている情景ではないかと思う。

前田・岡崎川高須説に賛。

清川川端説をとる。理由は「あやかりなんすな」の言葉が、高須説では生きない。

藤井川高須説賛。「あやかりなんすな」は高須説で十分生きていく。

丸川高須説でよし。

岡田川遊女が「めし」と言う時は、相手の客に対しての場合のみ。その意味で、もし客の友人が、子供をつれて来た場合には「めしにあやかりなんすな」とは言わぬ。従って、もしこの句が妓楼においての場合なら、必然的に、子供をつれて来たのは、遊女の客ということになる。何か外出先から、子供をつれて寄った時の句かと思う。

礎稿の説も面白いが、子供の出来る頃になると、彫言葉ももうぬけて「あやかりなんす」などとは言わないと思う。

106 乳母が来て鼠のふんをほき出させ

葉十

川端川句解の要なし。手なれた乳母の落着いた処置と、周囲の狼狽とを現わしている、面白い。

高須川「鼠の糞」を口に入れた子を、お乳母さんがうまくあやして「吐き出させ」

たという、それだけの句であろう。

前田川賛成。「来て」が不要。意図が見えて常識的である。

岡崎・清・藤井川賛。

丸川賛。「ほき出す」は「はき出す」の江戸言葉。

岡田川賛。

107 けふハ御屋舗さと若くなつて出る

閑々

川端川「御屋舗」は御屋敷者の略称。大名または旗本などの御屋敷に勤めている端下女中のこと。宿下りでもしていた娘か、或は今日から御屋敷勤めが決まった娘が（後者と思う）化粧で若作りしている様子を詠んだ句であろう。

高須川「今日は」が疑問。これから屋敷勤めをするのなら「今日は」が変。いやに「若作り」で出かける踊り子が、いぶかる朋輩へ「今日は御屋敷さ」と言ったという句かと思うが、意味がとれぬ。

前田川いろいろ勤めを変える女が「今日は御屋敷さ」と、若作りして出かける情景であろう。「今日は」は少し得意然としたさまが感じられて、よく利いている。

岡崎川この御屋敷は「御屋舗」としてあるので、大きな商家（老舗）とみたい。かつてそこに女中勤めをしていて、今は長屋で世帯を持っている相当年輩の女が「今日は旧主に御機嫌伺いさ」と、若作りして出かけるところ。

清川岡崎説をとりたいたが。

藤井川岡崎説に賛。この「御屋舗」はやはり老舗。その昔何かロマンスがあった感

じ。「今日は御屋舗さ」の「今日は」は、年甲斐もなく化粧した弁解と、心浮き浮きした様子が、よく出ている。

丸川御留守居の屋敷に呼ばれて行く踊り子とみたい。「けふハ」には特別の意味はなく「今日は××（お茶屋の名）さ」というように「今日は御屋敷さ」と挨拶的に軽く言ったもの。「屋舗」は当て字で、文字にこだわる必要はないと思う。

岡田川丸説の通り、遊里でも踊り子なども「武家屋敷」を「御屋敷」と言い、「武士」を「屋敷者」と言ったので、この句は御留守居の客に呼ばれた踊り子を詠んだものと断定して、間違いない。——なお、古川柳の文字づかいは、あまり信用できぬ。あて字が多いからである。

謹賀新春

中島生々庵

大阪市南区鰻谷仲之町二〇

若本多久志

豊中市字服部五〇八

松景園住宅七六

松江梅里

大阪市阿倍野区

松崎町三ノ一〇

あるぼんちの財界人



東野 大八

うちの近くの村から出て成功した人に長谷川鏡次という人がいる。

長谷川木材の社長で酒恒常務だ。こういってもその銘柄にうとい人もござるので、早いところで「大正会」の世話人という紹介の仕方をおこう。

大正会とは、大正生れの名士連中を網羅したもので、名簿をみると雲カスミと思うほどの数だ。主だったところをあげると、

池田弥三郎、原文兵衛、尾上梅幸、高橋圭三、山田五十鈴、五島昇、越路吹雪、江崎真澄、三島由紀夫、清水昆、森繁久弥エトセトラ。

大正会の会則も面白い言葉が並んでいる。

コノ会自体ハ、建前トシテヨイコトハシマセン。タダシ、他カヲノ要請ヲ招請ガアレバ、相談ノ上ヨイコトヲスル場合モアリマス。

衛生ノタメ、サカズキの献シエウハ行ワナイ。

コノ会議デハ、出身地ヤ出身学校、所属団体ナドノ派閥ヤ、各自ノ事業ヤ職業ナドニ関スル話題ニツイテ、二人以上デ、ホカノ会員ガ面白クナイト思ウヨウナ話ヲスルコトヲ禁ジマス。

私も大正の初めの生れだが、長谷川さんと同じ三年生れのトラである。だから気分があうのかこの人の言うコトはみんなゴモットモというところがある。

「人間いつかは死ぬ、若い若いと思っていた大正生れも私のようにハゲ頭もいるし、入歯の者もある。気ばかり若くても万事身体がいうことをきかない。指折りかぞえてもあと一万日もつまい。

情なくもあるし、あせりも出る。この少い残日を悲壯感ばかりで生きてもつまらない。倒れた者は抱き起して、金より友情を大切にし

よう、そういうわけで大正会を作ったし、大正会のこれが精神だ」と彼はいう。

長谷川さんは木場のぼんちの育ちである。二代、三代目という奴は親父ほどコクがない。立志伝中の人物を父に持った者は必ずといっていいほどいい学歴をつけてもらっている。オヤジのソツのない訓戒で育ち、その経験の強みでコッテリ家業のワキ添を勤めてもらったおかげでやることなすことすべて適確、だから全般に優等生のあとつぎが多い、こういう点を絵にかいたようなのがこの人だ。

私自身、大正生れだが、なぜ明治に生れなかつたのだろうか、とよく思う。モノも安かつたし、女も親身だし、生きていても今のような話のはかのチンピラ族もいず、気が散らずに高下駄で街を歩けたのに、と思う。

彼にもこういう考え方があろうだが、この人には財政の切り回しに全くムダがない。エンピツはナイフで削れ、という話だ。新式のケズリ器だとケズリガツオを作るみたいだ。

この人はよく潰れかけた会社に乗り込んでいってはりっぱにたて直して帰ってくる。そのコツはなんだという、

「中小企業は人も少ないし、組

続

川柳書架

(33)

続短詩私論

山村 祐 著

★本書の巻頭に「はじめに」と題して著者の定型観を述べ、従来の定型を乗り越えてゆかないことには新しい創造方法は生れてこないことを説かれている。

★目次―A・定型など、短詩の性格・短詩の諸問題・定型のゆくえ・定型律の回帰性。

B・句評など。カッパむこキツネむこ・ギターを弾く男・NOTE (abcd)・句集(偽冬)に寄せる・句評たかほと夕陽・寸感ABC。

C・伝統など。伝統から遠く・紋十郎と川柳・古川柳の構成。

D・内部と外部。諷刺について・句を変えてゆくもの・あとがき

★一九六三年一月二五日発行。B6版一九〇頁。定価五〇〇円(〒共)発行所東京都豊島区巣鴨六―一三二九森林書房。

★著者は詩人で、氏の短詩論は短詩界へ多くの示唆を与えている。

謹賀新春

川柳雑誌社阿倍野支部
事務所 阿倍野区松崎町3-10 (松江梅里方)

伊達 堀子
今西 生
本多 柳志
金井 文秋
加藤 繁雄
河井 庸佑
木村 十悟
菊沢 少松園
久米 奈良子
松江 梅里
宮尾 恒明
小川 喜仙
新川 博也
辻川 喜仙

ABC順

長野 元一 (号・井魁)
山口県防府市大字西佐波
令字幸地一三六ノ一六

米沢 暁明

愛媛県大洲市
常磐町九一番地
岸和田市上町三六

内藤 きさ子
電話岸和田員塚②八〇七九

山内 静水
竹原市竹原町田中

喪中欠礼
高 峰 柳 児

長野県須坂市太子町

識も弱いので、一人の回転速度の強弱でその成否の分れ目となる。だから一人ずつをうまく気持よく働けるようにしていくことが第一じゃ。経営者じゃ、と自分を鼻にかけている人間はとなく飛車、角ばかりを頼りにして動かしただる。これは男子の本懐だろうが、将棋というものは金銀桂馬から歩まである。この特徴を生かすところに勝ちが出てくるのだ。事業は人間なんだからこの心がけてやればツブレかけてもしぜんと立ち直ってくる。この場合、モノを素直にみてひがまない男、自分よりまずほかの人のことを頭におく男がゼッタイ要る。これがそろえばもう立ち直ったようなものだ」

こういう人間に育つには、オヤジの教育やシツケがモノをいう。

この長谷川さんのオヤジは、チビのセガレを前にしてはよくお前は大きくなった何になる、ときいた。陸軍大将や総理大臣とでもいったら何もいわないので、しまいは材木屋になる、とキツバリ言うようにした。生家が材木屋で彼が総領だからオヤジにすればコタエラレン、うん、よしよしエライ奴じゃ、と好きなモノをくれた。

もらったオモチやたべものは決してイクラしたかをきいてはいけない。きくと出したものはすぐ

捨てたりつぶしたりしてしまう。このシツケは、モノの値打ちをつけるくせをもっと貰ったり贈ったりするときにまごころが入らず、下の人へのたしなみとならないからである。

母者ひとりっばで、たくあんをチビの彼の眼の前で切り、端からそれを彼に与えた。シツポは硬くてまずいが、それを先にたべることによって、他人の人にうまいところがあてがわれることになる



父親は「メカケと借金、自家用車をもたん」というのが自慢で、よくそいつをきかされた。

みるとうらやましくて、もっと重いのがメカケ、そういつてメカ

ケも古くなるとツチのカカアと同じリクツで、一つのおすで、めすが二つあるので手間と世話が余計かかる。それでどっちにも子供ができたら気を使って寿命をケズるようなものだ、といったという。いい話だ。

オヤジは宴会があっても必ずいくときは市電に乗った。いくときはシツフだからだ。

こういう人間の下で朝夕てなすけられたのだから狂いはない、それで出来上ったのが長谷川というやり手の財界人だ。

私はいつでも金よりも友達を選べといっている。目上の人なら誰とでもあうことだと教えている。亡くなった長谷川伸が

「私を今日あらしめたのは、人にできるだけ沢山あえてそして話すことができたからだ」といっている。世話ものでは一流だったこの人の面目がこの一言でつきていようだ。

川柳もこの調子でいけばいい句ばかりできて困るほどになるだろう。人に沢山会い、長谷川さんみたいな人に出会えば思い切り時間をかけてしゃべらせること。

人間に沢山あうと、いいところを前に出すことを忘れて悪いところを味をもたせる結果をつくり出す。それだから会いなさい。借金取りにも……。

川柳 鶴の姿

阿部佐保蘭著

★巻首に村田周魚、麻生路郎両氏の序と自序があり、自序には来年在父母の二十三回忌に相当するので、この句集を霊前に捧げると記されている。

★目次を抜萃すると、

鶴の姿、自選三十句、吉川英治と川柳、自選五十句、R・H・ブライス教授と語る、家族の部、人物の部、戦争の部、商売の部、芝居の部、運動の部、旅の部、慶弔の部、雑の部、武玉川、川柳の英訳を頼まれて（編英四郎、英訳川柳、仏訳川柳、あとがき。

★昭和三十八年十二月一日発行。B6版一七七頁。定価三〇〇円。

発行者東京都中野区鷺宮一ノ八四阿部佐保蘭。

★著者は川柳職訳研究会併びに俳諧かほる会を主宰。

謹賀新春

中島生々庵
中島小石

大阪市南区鰻谷
仲之町二〇番地

金泉万楽

大阪市東淀川区
淡路本町二ノ六八九

隠岐不酔

姫路市茶屋町三六
電話姫路二二〇七
五五九三

味のコーヒ

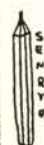
モダン 川柳

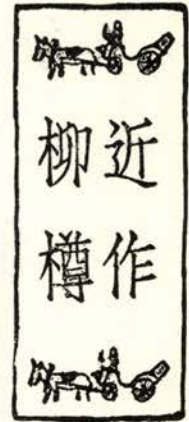
心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL(271)6684

御集会には随上御利用下さい





麻生路郎選
北川春巢選

あわれさは運動員もいれなんだ 倉敷市

水谷 谷水

浮動票で決った職員とは淋し

同

魚屋に結婚記念日教えられ

同

新婚をなぶり後家の身わすれとり

同

ビクのぞいていくら とくさ 小馬鹿に

同

御本復びろうな話で茶をよばれ

同

日曜日ババの加勢を当てにする 宮崎市

野口卯之助

奇蹟でもあればと思う不しあわせ

同

がや がや とピーチクパーチク婦人会

同

名門を誇る系図を虫が食い

同

カーテンを閉めて中では叱られる

同

年の功この頃ババにある丸味

同

亡命生活

暗夜航路星は僅かに動きたり 福岡県

小田 無限

ああ虚無の酒海に叛骨漂えり

同

時雨 を聞き ケネディ世に在 り 思 う

同

この地球気に入らんのか毛沢東

同

老らくの寢床交通事故もなく

同

愉快族殺し屋ばらばら日本人

同

気まかせですのと内職精を出し 竹原市

山内 静水

幸福はすでに亡父の歳を生き

同

床もない宿舎ピアノをでんとすえ

同

複々線追いつ抜かれつ旅たのし

同

忍術がうけて芭蕉は横向かれ 芦屋市

里田一十

華僑名あって神戸の菊花展

同

菊作り菊の虫には容赦せず

同

鳥肌になって現場を見て戻る

同

豊作を牛は冷たい眼で眺め 仙台市

平野 光道

二人連れ朝のラッシュに邪魔 がられ

同

自衛隊の制服が酔う文化の日

同

ハイボール飲みわけBGまだ嫁 が

同

謹賀新春

石倉 旅風

大阪市西成区松通二丁目八

小林 孝正

新居浜市西原甲一三三九

室井 八九寸

京都市北区紫野

奥津 啓一朗

東京都目黒区芳窪町四一

川岡 靈眼子

諫早市天満町一二九七

八木 摩天郎

八木 徳子

堺市九間町東二丁目九

富柳 会

高橋 尚史

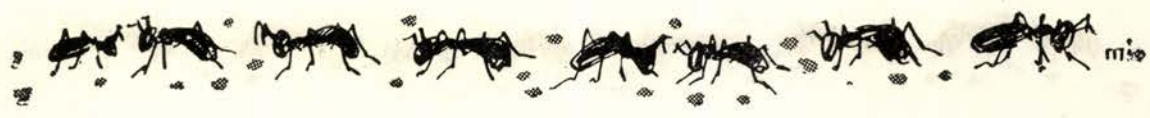
富柳 会

浅川 八郎

川維 大聖寺支部

石川県加賀市大聖寺永町

川維 大聖寺支部	石川県加賀市大聖寺永町 一五〇 野村味平方	富柳 会	高橋 尚史	富柳 会	八木 摩天郎	八木 徳子	川岡 靈眼子	奥津 啓一朗	室井 八九寸	小林 孝正	石倉 旅風	謹賀新春
----------	--------------------------	------	-------	------	--------	-------	--------	--------	--------	-------	-------	------



晴着二十歳(はたち)の胸をみつめて	同	旅帰りどれも待ってた顔に見え	鳥取県 鈴木村諷子
心境の変化たやすく節を曲げ	岐阜市 日東里	異母兄のある宿命に産れて来	同
袴を脱げば存外世故にたけ	同	大山紅葉狩り(三句)	
陰日なたなくてのっぺらぼうに見え	同	旅愉しススキがバスの窓を撫で	同
悪友の忠告なのでくが	同	梵鐘の紅葉を透けてきこえて来	同
禁鳥が二の膳に載る山の宿	同	執念のこもりし如く紅葉し	高知市 須藤 俊江
二周目の木馬はパパを呼ぶ余裕	加賀市 木村 一路	女盛り瓜田へくつを入れたがり	同
雑草のような強さで町議長	同	一滴も飲めぬで再婚断られ	同
パチンコの前でお久しぶりに逢い	同	色 あせ 間・恋せよとまんじゅしやげ	同
ベルトコンベア式に月給運ぶなり	同	夢よもう一度株屋とくされ縁	竹原市 杉原 愛鳩
真夜中の音のひとつにパパ帰る	羽島野市 古川 静波	白珠の歯にしむ酒の値があがり	同
割勘を払うて気づいた雨の音	同	肩までの甲種合格だった父	同
へそくりにも任期があった新紙幣	同	酔がさめればもとはたらき虫	同
妻子を実家へ帰す		定刻に来た会場の畳数	京都市 大久保 和二郎
こうせねば喰えぬ親子の別れ船	同	名を見とくバスの車掌の行き届き	同
若い娘と並んで撮って齢を知り	新居浜市 小林 孝正	おけら火の足を追い抜く暮の息	同
恋人の電話息まで聞えて来	同	神棚にみかんが重い鏡餅	同
レントゲン瘡でなかった酒の味	同	元旦へ区切りをつける雪が降り	新居浜市 安藤 桂仙
病気癒ったで神棚の花も枯れ	同	てのひらの畑へ日曜あてにされ	同

林 昌 男 大阪府泉北郡忠岡町 二二九北住宅三八号	木 村 千 容 岡山県倉敷市新川町 千宅番地	弘 津 柳 慶 山口県柳井市専売公舎内	月 原 宵 明 今治市常盤町八丁目	南海電気鉄道株式会社 川 柳 部 一 同	会 柳 川 局 交 北川 春 巢 富岡 淡 舟 児島 与 呂 志 米虫 一の 字 岡島 孤 舟 森 扇 帆 浜 畑 胡 蝶 舩 草 深 醉 舩 小田 垣 鯛 牛 橋 本 雅 巢 福 島 正 則 藤 井 力 泉
---------------------------------	------------------------------	------------------------	----------------------	-----------------------------	--



手のこんだ悪をテレビがまた教え 新居浜市

安藤 桂仙

肩巾で息をついてる新記録 見島市

伊丹柳瓢子

ああそうだけで他人の死亡記事 大坂府

井上美恵子

無理をしたらしいお膳にもてなされ

同

相談欄私と同じ意気地なし

同

競艇の隣で稼ぐ質のれん

同

幹事まで酔うてすき焼煮えつまり

同

大阪に兄弟が居り衛生車 岡山県

秋野 萩路

顔ばかり見えて恥かし初舞台 マカベル

上田 紅溪

人づくりしかし殺人続く日々

同

かき捨てと思うた恥が先に知れ

同

バス代をおごりビールはおごらせる

同

薬売り旧友らしく尋ねて来

同

木登りが出来ず女の組に入り 大坂市

福富 隆子

すねている子の部屋の灯がまだ点 羽曳野市

稲本 凡子

事故現場遠く同情だけですみ

同

ぎこちなくブラン通りの旅終る

同

遺族三千等となかなか眠られず

同

想い出は生きて静かな一人旅

同

経済白書もうける人はもうけてる 枚方市

宮川 珠笑

朽ちてよし祭囃子を聞く案山子 玉島市

水粉 千翁

転んだ児起きるまで待つ人づくり

同

化粧する日への夢あり女病む

同

保険金なくなり亡夫忘れられ

同

隣から扉も届く家に住み

同

計算機オールドミスに酷使され 大坂市

西本 保夫

流行と云う紙袋妻もさげ 山梨県

赤池 五朗

自動釜今宵も閑な社長邸

同

古里の祭と云うに稲を刈る

同

特売場来年着せるシャツも買い 松原市

守屋 万竿

洗濯機にくもが巣をはる農繁期

同

ステレオも聞けぬとこぼす生活苦

同

貧農の夢は都会の子を思い 兵庫縣

常岡 孝風

あてのある孫の便りにはほえまれ 兵庫縣

斎藤たけお

菊真白いのちをおもう咳激し

同

悪書追放パパがこっそり読んで居り

同

ジェット機が飛ぶ血税をしいられ

同

味方だと信頼してたあほらしさ 大坂市

林 緋砂子

橋 本 緑 雨

大阪府東住吉区平野
西之町八三

唐 崎 専 翁

芦屋市翠ヶ丘一六七
電 芦屋②六二八二番

友 淵 貴 山

大阪府泉北郡高石町
北五〇六

川 雜 米子支部松露川柳会
小 西 雄 々

米子市富士見町一三五

福 田 丁 路

高槻市木室六九二ノ四

部

雜 支 同

川 造 一

玉

富柳会一同

富田林市公民館内

岸 和田川柳会

岸和田市宮本町
電 ②七六〇四

竹 若 柳 潮 花

高槻市富田町七六七
総持寺団地36 304



故郷からの果物父母の味がする	同	良心のかけらが涙の目をこすり	玉島市	井上 旭峯
鹿せんべい味見をしてる人もあり	西宮市	大望もなく老妻と屠蘇に酔い	同	同
能のい鷹のようなプロレスリング	同	急停車したみたいに病んでいる	バロアルト	斎藤 流路
燃えるもの燃やし仲仕の昼やすみ	大阪市	耳飾りなどは要らない妻の耳	同	同
仮縫へ愛想でほめる肥満体	同	大惨事写るテレビに掌を合せ	京都府	西村句楽坊
選挙区のお上りさんをほっとけず	竹原市	あまく見た一票ぐらいが落選し	七尾市	松高 秀峰
石灯籠灯りを入れて芽出度い日	同	ひょうたんも飾って自慢話が出	加内長野市	森本黒天子
年よりに年を聞くなと叱られる	高知県	夫売り妻は買増すレジャー株	神戸市	吉田 隆史
七回忌坊主も酔うて笑い声	同	ショートカットになり女強くなり	大阪市	山地 判志
早耳のどこで聞いたか火事見舞	大阪市	ロマンスグレイ女は好いた	見せ 松江市	岡崎 祥月
税務署が去んですき腹思い出し	同	ハネムーン早くも飼育見せはじめ	布施市	坂東 小桜
禁酒して妻に忠実とは淋し	岡山県	褒められてみればそうかも知れぬ妻	石川県	大山 雅城
父さんに内緒と娘らしくなり	同	任せたら物価倍増が先に来た	大阪市	大野 修二
栖鳳も宿料の中床の軸	大阪市	東京へ次男の嫁を見に上り	羽咋市	三宅 ろ亭
チップからかゆい処まで手が届く	同	横着の尻押しをする電気釜	松江市	岡崎 雪美
養老院髪染めて見る若さ持ち	金沢市	帰郷するそんな見舞いと見合い兼ね	鳥取市	近藤 昭夫
魔がさしたなどによろめき	同	夕暮れになるとちがったライト湧き	今治市	八塚三五島
貧しさは折くも卑屈な語をならべ	岡山県	両親が居るだけ幸福だと思ひ	岡山県	梶川 信子
胸あたたまる記事もちよびり年の暮	同	まあごゆつくりには昼を食、夜を食	大阪市	森川すみれ

防長観光KK 国弘 伍一 (半休) 下関市上新地町六ノ七五三	秋 月 宏 方 和歌山市今福東ノ町一二八	長 野 文 庫 今治市港町八丁目	工 藤 甲 吉 青森市長島三ノ二 東奥日報社編集局内	川柳並木会一同 代表 木山 遠二 岡山県笠岡市山口	東京都中野区鷹宮一ノ八四	阿部佐保蘭	名古屋市区米田町一六	長谷川 鮮山 電話 九〇四五番	那 谷 光 郎 加賀市大聖寺荒町四三	田 村 緑 朗 岡山県英田郡美作町湯郷五五一 虹川柳倶楽部	新 岡 回 天 子 電 (唐津二七八)	榎 紫 光 愛媛県南桑郡壬生川町大 曲リ・富士紡水源池社宅
--------------------------------------	-------------------------	---------------------	----------------------------------	---------------------------------	--------------	-------	------------	--------------------	-----------------------	-------------------------------------	------------------------	-------------------------------------



川柳

題詠句の鑑賞

麻生路郎

川柳は折りに触れ、時に臨んで、その人の人生観、社会観、世界観などを自由に詠むものである。その点から言うに雑吟さえ創っていればいい訳であるが、初心者には何でもいから、自分の思ったこと、考えたことを、五音、七音、五音を中心とする定型で書いて見給えと言っても、そうやすやすと書けるものではない。そこで、「父」とか「母」とかという身近な題を与えて創らせるのである。それを私たちは題詠句とか、課題吟とか呼んでいるのである。課題が出る焦点がきまるので、漠然と句を作ろうとするよりも、いい悪いは別として、早くまとまるものだ。

しかし、作家が課題によって作るのは何処までも作句の練習であって、ホントの川柳はそう生やさ

しう生れるものではない。

でも、句の構成やリズムのこと、字句の選び方や省略のこと等々が、この題詠を繰り返すことによって広くも深くも、知悉することが出来る。とすれば初心者だけが題詠していればいいという訳のものではない。

題詠句にはいかにも題詠だなアと思うようなフィクションの句も出来るし題詠の欠点を遺憾なく露出した句も出来るが、たとえ題詠句であっても、作家の個性も出て

もいるし、雑吟として創作されたものとは何等遜色のない句も出来るというのを知っておかねばならない。次の句は何れもこれまでに詠まれた題詠句である。読者と共に鑑賞を続けて見たい。

課題「一ト旗」
一ト旗の目標松下幸之助

(恒明)

句意は説明するまでもなからう一ト旗挙げて、故郷へ錦を飾ろうという所謂一ト旗組の目標は……と言えは全国一の納税王松下幸之助だと詠んだのである。

この句を、はじめて読んだ読者の多くは、そのネライの余り巧みなのに、アッと叫んで感嘆したのに違いない。

しかし、繰り返し、繰り反し味読して見給え、はじめの感激がやや低下するくらいがあるように思えるがどんなものであろう。

それはこの句は、作者の機智の産物の幅の広さに起因するのではなからうか。欲を言えば一ト旗組の心境を咀嚼する以前に松下幸之助の名に圧倒されて、詩情が稀薄になったことである。

課題「立話」

立ち話たこが足出す市場籠

(梅里)

市井の風景をごく平易に詠んだものだが、おそらく作者の実感かも知れない。題詠吟として実感が出過ぎるくらい出ている。立話している主婦？の市場籠から、ニュツと鰯が足を出すなどとは全くグロテスクそのものである。素直な写生句であらうが、表現力の力強さがものを言っている。

課題「8ミリ」

8ミリへも一度橋を渡らせる

(水客)

8ミリを購って以来、ワイフのモデル役も大得意ではない。

「オイ、モ一度橋を渡ってんか。なるだけ明るい顔をしてネ」

「コレでいい」

「そうだ。橋の途中で、川を一寸のぞくせスチュアも忘れないうでネ……」

甘い句だが、明るい写生句だ。

課題「多数決」

多数決またまた中華料理なり

(阿茶)

宴会の幹事ぐらい気をつかって、それでいて感謝されないものは少ない。好きでやっているぐらいにしか考えては呉れないのである。

謹賀新春

川傍柳初篇研究グループ

昭和三十九年一月

幹事

川端柳風

整理

高須啞三味

共述

前田喜代人

岡崎重義

福岡市東区粕田三ノ三三九

清博美

清水市江町二九四

藤井和雄

宇都宮市西大室町二四四九

丸十府

東京都豊島区池袋六ノ一九八

岡田甫

東京都新宿区戸塚町一ノ四四八

川柳雑誌社ハワイ支部

ウイロー社

同人一同

何処にしよう、何にしようと思
い探がした末に、多数決できめた
ということになり、人数がハッ
キリしないからと中華料理にきま
ったことを、「またまた中華料理
なり」と詠んだのである。軽い穿
ちだ。これも作者の実感から生れ
たのであろう。実感強い。

課題「尾行」

遮断機は尾けてる方へ味方せず

(遠二)

経験派の作家は、斯うした思い
つきの句を生むのに、そう苦勞は
しないようである。

アッしまった。先方のくるまが
ぐぐり抜けるか抜けないうちに、

遮断機が降りたのである。遮断機
には情実はない。ここまで尾行し
て来て取り逃がすとはというこ
ろを「尾けてる方へ味方せず」
と表現技巧で生かした句というべ
きであろう。この句などは題詠吟
の題詠らしさを十二分に發揮させ
た句と言つていいであらう。

課題「女性」

二十貫十一貫の妓に振られ

(恵二朗)

堂々たる二十貫の体軀の持主が
僅か十一貫そこそこの妓に振られ
たのである。

男性と女性、デブと痩せぎすの

コントラストである。悲劇は案外
こんなところから発生するもので
ある。この句などは何んと言つて
も題詠でなければ生れない句だ。

課題「人づくり」

今まではなにしようたんや人づ

くり

(恒明)

池田首相が人づくりを提唱して
からあちらでも、こちらでも人づ
くり人づくりとうわごとのように
いう輩が殖えた。

「言い出し屁の首相こそ、今まで
はなにしようたんや」と大阪弁
で、真綿で首を締めるように抵抗
するところがこの句の面白さであ
る。

課題「善意」

寺持ってぶたれた善意よくわか

り

(句案坊)

一寺の住職ともなれば、その修
業は並みだいていではないのであ
る。ぶたれた善意があつたればこ
そ今日があるのだと、ようやくに
して判つたというのであろう。

「よくわかり」の下五の表現はや
や稚拙であるが、作者の真情を素
直に述べたところにこの句のいの
ちがある。

課題「退職金」

退職金直ぐにも倍になるハナシ

(八九寸)

世の中には他人の退職金に眼を
つけて、直ぐにも倍になるような
話を持ちかけてだまし取ろうと
いう男がいるものである。そこを
つかんだのがこの句だ。穿ち句だ
けに、詩趣に乏しいのはやむを得
ないかも知れないが、今少し句に
余情が欲しい。

課題「男ざらい」

男はこりこりと秋の鏡拭く

(水客)

「男にはこりこりしました」とい
う女性も身だしみだけはしている
のである。「秋の鏡拭く」で情趣
は豊かである。秋ともなれば、そ
のこりこりした箇の異性の魅力が
何なく恋しくなるのではなからう
か。

課題「品切れ」

品切れや言うてあるのに妻が出

る

(可住)

ビールは
楽しいものです
人の心を
明るくします
和やかな
雰囲気をつくれます



謹賀新年



ビールは
アサヒ

巻を繰ら
しいてい
るのであ
る。
カメラ
マンは、
文句なし
にパチリ
と幽かに
音をさせ
た。

もう少し持っていれば、ウンと
値上りすると、先を見越しての品
切れだと言つてあるのに、
「ああ、それでっか、少しぐらい
なら、お譲りしてもよろしくござ
います」と妻が持ち出して来たとい
うのである。女賢しうして牛売
り損うというが、妻クンの視野の
狭さはいたしかたのないところ
そこを巧くつかんだ句だ。

課題「ふだん着」

ふだん着で大物らしく写させる

(水京)

ブンヤがやって来た。時の人と
してカメラに一寸這入ってもらい
たいという。

明けましておめでとうございます

川 婦 人 友 の 会 連 絡 事 務 所

大阪市南区二井戸町二三
山 川 阿 茶

武居	児玉	三井	天正	鳥取	須藤	岩田	宮尾	西村	林村	中村	西川	藤岡	置田	久米	沢田	吉川	市場	八木	小西	内藤	藤村	酒田	西出	高橋	太田	中山	麻生
居	し	井	み	取	藤	田	あ	村	村	村	川	岡	田	米	田	川	場	木	西	藤	村	田	出	橋	田	山	生
美	げ	醉	さ	周	俊	美	い	梨	春	晴	み	花	ふ	奈	美	悦	カ	徳	富	き	村	清	一	操	良	島	霞
司	子	夢	子	甫	江	代	き	里	榮	子	子	梢	じ	子	喜	子	女	子	子	女	子	子	子	子	子	石	乃



龍宮の乙姫

富士野鞍馬

新年に当り、今年には「乙姫」年だから、それに因んで龍宮の乙姫の古川柳で、お正月を笑つて頂こう。

乙姫のおやしむちく太右衛門殿 (タル五八)

乙姫という美人は、海底の龍宮に居るといふ伝説上の仙女である。それでいろいろにおもしろく川柳にも詠まれ、街頭の飴売りが「いっくたのちく太右衛門殿、太右衛門殿の乙姫が」とうたつてゐたので、「乙姫の親父」と洒落ている。

龍宮へうつ白波は女なみ也 (タル五八)

美しい乙姫さんが居る龍宮だから、女波ばかりが打ちよせるだろうと詠まれている。

乙姫は蟹の缺で爪をとり (タル八二)

乙姫の針箱蟹へ鈴をつけ (タル一〇一)

海底生活であるから、缺には、蟹を使っただろう。また龍宮は浅草のりを落し紙 (タル五三)

乙姫はえてを浅草のりてふき (タル九七)

と、浅草のりを紙として使つただろうがつてゐる。

陸の美男、浦島太郎が、龍宮へ迎えられ、乙姫の寵愛をうけたといふ伝説は、謡曲、童話にもなつて、普く知られている。

龍宮は釣師をとかく聲に取り (タル二一)

その浦島は釣師であつた。うら島に岡はうづきをねだる (タル三二)

龍宮には、海ほうづきはあ (タル三二)

るが、岡鬼灯はない。それを乙姫はねだつただろう。

こうして浦島は、三年の間たのしく、榮華に乙姫の愛をうけ、いよいよ帰ることになり、土産に、開けてはならぬという玉手箱をもらつて帰つた。

乙姫をしめて帰るとばくばく (末三)

浦島は帰つて、その玉手箱を開けてしまった。すると白い煙が出ただけで何も入つていなかった。そして浦島は忽ち白髪の老人になつてしまつたといふのである。それをま (万安七義)

とほうずもなく年のよるふたをあげ (万安七義)

浦島は歯ぐきをかんでくやしがり (タル三七)

まっ白になつて浦島くやしがり (タル三七)

と詠んでいる。玉手箱を開けなかつたら、いつまでも若い美男で居られたのに、玉手箱仕まつ時には皺だらけ (武初)

玉手箱仕まつ時にはほうり出し (拾五)

といふことになつたであらう。この伝説は「日本書記」「万葉集」にも書かれてある。

龍宮の聲をも入れる厄払い (タル二九)

節分の厄払いの文句に「浦島太郎は八千歳」と唱えるのを、乙姫の聲と洒落ている。

倭藤太秀郷は、乙姫にたのまれて、三上山の六百足を退治したので、龍宮に招かれて、乙姫の歓待をうけたといふ伝説もあり、

ずぶずぶずぶと秀郷は客にゆき (タル九二)

藤太様お入りと海月門をあけ (タル九二)

腰元のさよりの酌で藤太欲み (タル九二)

くらげやさよりのサーピス。そこで乙姫は、藤太との浦島はまだ達者かの (タル一四一)

浦島は無事かと藤太尋ねられ (拾五)

と尋ねた。秀郷は二度目の聲といふことになり、

浦島の女房を藤太知つて居る (不安九桜)

秀郷も二度目はついで根まで入れ (タル六五)

といふバレル句もある。

龍女の頭痛倭屋で全快し (タル九七)

「倭屋」はかぜ薬で、倭藤太を利かせている。

秀郷は浦島のように長く滞在せず、しばらくで辞去した。浦島にこりて藤太は長居せず (タル七六)

その帰りに秀郷も土産をもつた。

龍宮は何ぞかみやげくれる所 (拾四)

これは種々御丁寧と倭藤太 (タル二八)

秀郷はあじなみやげを買つて来 (拾五)

その土産は釣鐘であつた。くひも着もならぬを藤太寺へ上げ (万安九仁)

それを秀郷は三井寺へ奉納したといふのである。

一景は龍宮迄もひびいてる (タル四七)

「三井寺の晩鐘」として、近江八景の一ツになつてゐる。

俵がないと釣鐘の藤太なり (タル一〇八)

鐘藤太ではおかしいで俵也 (傍二)

と、川柳はおもしろく作つてゐる。

ニッサン セドリック・ダットサ/ フルバード

兵庫県下特約販売店

運輸省指定重整備工場

尼崎日産自動車株式会社

専務取締役 若本真彦

尼崎市昭和通二丁目四八 電話大阪(481)局 3308(代表)

明治・大正柳誌巡礼

奥津啓一朗

大正十年(一九二一)

三月二十日、柳太刀、第三十三号、菊判八頁、神戸市須磨区下今池、神戸川柳ツバメ会発行、編集発行人前田青岸、一部五銭。

前田青岸
大阪に馴れて上手な嘘を吐き
柴田浪子
ロンドンの正月日本酒に酔ひ
中川露太楼

花魁の部屋に似合はぬ洋書あり
相元紋太

鼻筋をまだ新らしい筆で撫で
高橋古城山

春はまだ名のみストロブへ集り
雑誌前田青岸選、大正六年十月
創刊(未見)第六十号(大正十二年
十二月二十日刊)を以て廃刊。

因みにその終刊号に
「柳太刀を廃刊する」。

川柳事務に疲れたから廃める
柳太刀は私達同人の勝手気儘
なノートブックであつた云々
とある。

八月十日、らく書、第十五号、
変型菊判共表紙十二頁、兵庫東西
灘村岩屋一〇二神戸楽書川柳社発
行、編集発行人杉本正雄、投句所
神戸市多聞通二丁目二三五阪本千
山、一部十銭。

青波

見晴しの枝で植木屋一服し

千山

片親に別れて返事のよい子供

初雷

御無心へ番頭が出て納まらず

紅山

ゴム草履はいて内輪の癖がつき

大正九年五月創刊(未見)、終
刊年月不明御示教を乞う。(太田
かつみ氏蔵)

大正十一年(一九二二)

五月十五日、よのころ、創刊号、
四六判横綴十四頁、岐阜市元町二
丁目三七川柳よのころ社発行、編
集発行人篠田留吉、一部拾五銭。

足解を叱って師匠つうと立ち
岡本映糸(古川柳雑誌)ごとう
せんし生(蛙の謔言) 雑誌同人
選、募集吟素梅女選(蛾)岸本水
府選(傘)等が載っている。

創刊同人は松野暮朗、篠田雨
音、川村翠仙、上松巨頭子、後藤
千枝、欣々亭、加藤硯海の七名。
(河野春三氏より頂く)

昭和三年四月号(通巻七十号)
にて廃刊。

大正十二年(一九二三)

三月一日、白扇、第二号、変型
四六判八頁、神戸市上橋通四丁目

百二十番屋敷、神戸柳影草舎発行
編集発行人高橋幾寿、申込及投稿
所神戸市木通二九ノ一四中川露
太郎、一部拾銭。

初節句今年の金魚美し、
高橋古城山
中川露太楼

牛鍋を囲み天下の春に酔ひ
雑誌草舎選、課題吟露太楼選
(宮参り)句会誌草等が載ってい
る。(太田かつみ氏蔵)

八月二十日、新柳樽、第十六輯
菊倍判三ツ切横長形二十頁、北海
道江別町梁山閣江別川柳社発行、

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

スマートで
着心地良い

編集発行人金山吞天坊、隔月刊、
一輯拾五銭。

心にもなく許婚切ねて見せ
遠藤句集

金山吞天坊

決心をまた怯ませる母の愚痴
角恋坊(一家吟を評して) 内山

憲堂(心にあふる、もの) 創作社中
選、一家吟高木角恋坊選、課題吟

安川久流美選(静) 亀井花童子選
(姿) 大谷銀坊選(挨拶) 等が載
っている。

同人遠藤句集、大井耳目、佐藤
一声、杉村花扇、金山吞天坊、宮
島松花、八川柳史講話に大正十

一年五月には、江別町所在の富士
製紙会社の関係者、金山吞天坊等
の江別川柳社から八柳の芽(創
刊号は謄写版刷、二号より柳だる

後に新柳樽と改題)が刊行され云
々とみえる、第二十二輯(大正十
三年四月廿日刊)以下不明。

八月二十日、忍路、六ノ八、菊
判十六頁、函館市恵比須町四三、
山村方函館川柳社発行、編集発
行人函館市新川町二七四松原孫作、
一部拾五銭。

村井潮三郎

彼の女また私の好きな色を知る
足る事に眠むたい時に枕あり

大谷銀坊(言いたいこと一つ二
つ) 村井潮三郎(その日は晴れた
日だった) 飯沼鬼一郎(川柳断語)

課題吟飯沼鬼一郎選(朝) 白石張
六選(実) 等が載っている。

忍路創作(同人欄)には木村は
ま坊、落合酒落、中井茶化子、森
里魚、小野鈍多呂、辻八郎兵衛、

菊池不夜城、坂本笑劍坊、石光六
歩醉、浅利愛影子、池崎出ん亭、
畑喜多坊、北村騒駄楼、山村都ね

尺、村井潮三郎の順に句が並んで
いる。大正七年十月十日創刊(未
見) 大正十五年十月十五日菊半載

判の記念号を出して廃刊。

謹賀新年

大鉄支部

松川杜子
辻村遊子
植村紅生
宮口永紅
永倉求女
吉屋初月
都秋費月
大磯石費
中山江崎
山中江崎
阿万磯
西浦一
正松本水
客み求

さんばつは
何はともあれ
男前
(南柳)

男まえ

大阪市阿倍野区
天王寺町北一ノ十八
(省線寺田町裏駅南一丁)
TEL 06-287

私達の地下街



柳太が愛蔵者が
お互いに云いたい
ことを言うページ
を設けました。例
えば、「句評」で
いろんな批評され
た場合に、作家は
自分としての意見
も述べたいことも
あろうと思います
そんな時この欄
へ投稿されたい。
あまり長い時には
多少の取捨は含
み下さい。
(編集局)

農にあきた らぬ女

大鶴喜由

農と女の句を川柳塔十一月号に見出した。それが三句とも農にあきたらぬ女の句である。私は農の出だから農のよさを数々知っているが、この川柳が私をこんなに喋らせる。

田を守る尊さを娘ら理解せず

七面山

農は生命の網であり、国の宝であると思っていたが、近頃の娘にはびんと来ない。米もビールも電器も同じ物品の生産であると思っ

ていないようだ。むしろ田はうち等の気持ちを理解して呉れないとなげく。

精農といわれて嫁のきたがらず

可住

精農、すなわち、働くことに満足し感謝して精励努力する農民と辞海にある。かたぐるしい因習と労働の過重とムードに欠けている農家へ一生をささげるのは真つ平

だにが農だ女は街へ流れ行く

喜由

何がそうさせるか、女は背を向けて街へ去って行く。そして男がしょんぼりあとに残される。そのつれなさが目に見えるようだ。あの娘が十八になったら意志表示せねばと思っていたのに――。

「働けど働けど楽にならざる」のあてはまる戦前の小作農時代にくらべると、今の地主農時代は人間性と生活に可成り恵まれている。

それも棚からぼた餅式に似て勞せずして安値で都合のいい支払い方法で土地が入手出来ている。それに娘たちは何という量見だろう。テレビの普及等により都会生活のなまの声なまの姿を見せつけられては、娘等として言い分があるのもうなずける。それに現代の割り切った思想があとおしをしていく。試みに都会で働く娘と農に働く娘の一週間の日記を見くらべて見たい。

私が思うのに農の娘は働く場もより好みするが、それ以外に何かを求めている。例えばノルマルの労働がしたい。美人に見られる化

酒

清



灘・魚塩

金露酒造株式会社釀

粧がしたい。いい服飾がしたい。いい男性を自由に選びたい。お嫁入りにそなえて貯金がしたい。自動車免許もとりたい。気ままに遊ぶ時間と場所が欲しい。田舎の訛りから抜け切りしたい。などいくらでもあるだろう。

そこでこの頃やかましく言っている農の体質改善に娘等のこの気持ちも加味されて、少しでも女の居心地のいい農にして欲しい。阿呆なこと言うな環境が違ふ。宿命じゃないか。では今時の娘は納得して呉れそうもない。

題吟作家・雑吟 作家評寸感

山本素郎

川柳雑誌十一月誌上、直原七面山氏が題吟作家と雑吟作家について、多少のご意見を述べられていた。で、いちど通読して、なるほど穿ったような見方だと、もういちど読み返してみても、穿ちに似て非なるおもむきに、いささか落胆せざるを得なかった。

題吟、雑吟作家の両者をさまたちまに比喩比較しておられながら、直ちに「果して適中しているかどうか」という弱気、もちろん、比較推類の浅薄さを誇大な表現で飾られただけだから、適中なものもあつたものではないが、「考えてみればこの両者の違いは、各自が生れながらにして持っている人間の本性に基因するもので、おいそら、と途中で変えることは至難」とは、まるっきり両者を分析しようとする根本的な考え方があつたのであろうかどうか怪しくなっている。全く狭義の判断による誤診以外のなにものもない。

謹賀新春				川柳雑誌社鳥取支部				越智		あすなろ会	
大西	河村	増田	杉谷	森田	福田	岡嶋	北村	島	静	馬	水
八歩	日満	耕民	湖山	茗人	多可	芳道	三歩	島	静	馬	水
								今治市大新田五六五番地		大阪市南区綿屋町18	
										ボ ン 商 会	
										電話 (四) 8075 番	

詠 近 舟 同

事実はない。あるように思っているのは、未熟か、そうした先入観による錯覚、乃至は怠慢である。作家それぞれの自覚の程度をも斟まずして、ただ上っ面の状態のみをみて題吟作家と雑吟作家に区別することの軽卒さには首肯し難い。まして、川柳とは、人間陶冶の詩である、と認識する者であれば、すくなくとも、心底には題吟雑吟を問わずこなし、自信を備えているはず。川柳塔、近作柳

樽のみに限ってみても、氏の言う題吟雑吟兼備の好作家は至って少い、とうのは当たらない。私は、題吟作家とか雑吟作家とか区別する以前の問題として、川柳する者の川柳する姿勢と状態如何によって、その凝結し得る焦点の比重が、時には題吟に、時には雑吟に発揮するものとみていい。故に、氏の言われる「生れながらにして持つ人間の本性に基因するもの」は、題吟雑吟を問わず制作

上の個性風格として、後天的な体験思想を伴って顕われてくるものであり、先天的な本性によっても題吟か雑吟かの一方にのみ方向づけられるものでは決してないと思ふ。川柳作家としての自負は、先天的な安易さを克服する改革をこそ必要とし、この努力に対しては決してやぶさかであつてはならない。私たちが心の中には幾十幾百の大部屋小部屋が準備されているのだが、いまだその数と内容には

京都市 布部 幸男

年輪をうなづく春の酒の味

竜がまだ日本に生きている暦

春三日二十四時間針平和

年明けて早や黒柿のありポスト

酒うまし女に遠くまた近く

大阪市 橋本 緑雨

三菱製紙の招待

夕陽赤々舞妓は手をあわし

カメラ班の云うままになる帯だらり

須坂市 高峰 柳児

残業へ腹すく若さ買われてい

現役の強み派閥の色も濃い

脱穀機曲った腰にはげまされ

観光ブームへ社務所も策を練り

妊婦服もう諦めた共稼ぎ

豊作貧乏農家鼻水すすりあげ

今治市 長野 文庫

この人はどうしようかと芳名簿

神域へ恐れ気もなし十八九

和歌山市 秋月 宏方

ガム噛んで二人は若い歩きよう

神官だ巫女だ神様人件費

乳母車寝顔も一つ撮っておき

ママごとにもうアベックということば

働けば食える都会だはさみ研ぎ

大洲市 米沢 曉明

目の前に料理がほしい選挙民

墓場まで遂になおならぬ癖だった

物価高云云高級品が売れ

一口は値切っても見る妻となり

助太刀が間に合うような筋に書き

今治市 月原 宵明

どん底の弱味へ邪教押しかける

定年が刻々迫り株安し

名古屋市長谷川 鮮山

月給日ちゃんと揃った印の箱

銅羅が鳴る船からやと降りる記者

近所でもそれで通ったペンネーム

未知なものが多いためである。もちろんその中には川柳の部屋もあるわけだが、これとても題吟の室、雑吟の室とする独立した部屋を持つ余裕が欲しいもの。それを叙景、感覚、比喩、誇張などの調度で美しく飾れたらどんなにか楽しいことか。それをいつまでも不開の間、不見の間、未知の間としておく術はありますまい。

謹賀新春

吉田圭井堂

堺市浜寺昭和町一丁三〇

電界③三〇五四番

謹賀新春

支那 戸田 古方
中川 紫香
豊田 上ゆず
雑 竹内 圭三
小池 しげを
永藤 弥平
菊田 いさむ

凸版・写英版
技術を誇る

親切で
早



四象部
台本部
一貫作業

有限会社 東洋写真製版所

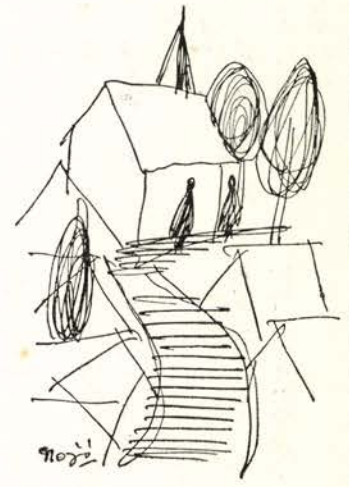
大阪市阿倍野区阿倍南町中2の6 電話 (622)0567・0568

一路集

幕あい

正本水客選

幕あいの長き気にせぬ村芝居 辰始
幕あいは町会長の御挨拶 弘朗
幕あいを借りて顔出す選挙前 秀峰
幕あいをばったり妻に見つけられ すみれ
幕あいに名優のあいさつ水を打ち 照子
幕あいに大漁を知らす村芝居 隆子
幕あいにこちらも一寸呼吸入れろ 亭
幕あいに涙の顔を見つけられ 半月
幕あいに見合いの席を立ち 愛鳩
幕あいのうちに見合いはすしとき 三五島
幕あいに呼出し電報持ったまま 旭峯
幕あいを場末の顔で売りに来る 千翁
幕あいをつなぐセンチな曲が鳴り 卯之助
幕あいのレコード安物はかり掛け 九呂平
幕あいにへ来屋は別な忙しさ 祥月
幕あいにへ女は手持ち無沙汰なり 雪美
幕あいの重詰めみんなで派手にあけ たいお
今泣いた顔どうし食べている棧敷 どんたく
幕あいの袖で台詞を繰り返し 幸雄



幕あいを来屋へ走りサイン貰う 降史
幕あいに棧敷の妓をそばで見る 淀月
幕あいはコートに襟に顔を埋め 可住
幕あいに欠伸を一つ見つけたら 凉人
幕あいに来しみんなでやる芝居 静水
一人来たことが幕あいに悔まれる 孝正
幕あいにやつと相手を見つけれ 歌子
幕あいに売り子のまねをする子供 寿美司
幕あいは若い情緒の宝塚 専翁
幕あいを不倫の恋はうつむいて 桂仙
幕あいを高うに買ったコマシヤル 惠二朗
総見の幕間おしやべり余念なし 生薑
幕あいを待ってはいましたウイスキー 萩路
緞帳が下りて見合いの豪華なる 光郎
幕あいに同会迷子を抱いてくる 宗太郎
幕あいを幹事にぞろぞろついて行き 保夫
旅芝居の幕あひ番付売りに来る 勝子
幕あいに団体みやげ開けてみる 李鳥
幕あいにちらり衣裳を見較べる 野迷路
幕あいは飲む喰う喰うで忙しい 雄声
幕あいに近くの顔を見渡して 秋月
幕あいは団体喰うたりしやべったり 圭水
幕あいのまた一等席はあいたまま 同

幕あいの呼び出しハン来ているな 十九平

住

幕あいのマイクに大きく呼び出され 晃男
幕あいをしおに招待姿消す 八九寸
おしのにびで来た幕あいが長すぎる 雄々
お見合いに開幕ベルが無視される 十九平
次の場を何度も読々開幕を待つ 圭井堂
幕あいに社長の女たしかめる 静波
幕あいを女せつせと編みつづけ 藤波
幕あいは来屋の前でウロチョロし 小桜
幕あいに知ったかぶり一人いる むじな

軸

話題まだつまず初日の幕がのび 水客

胸

那谷光郎選

口はども想っていない胸の内 すみれ
胸に聴けなどといわれて子は迷い 三五島
乳房出す胸を見ぬふりで見られ むじな
胸ボンと気軽く女将引受ける 晃男
抱かれて胸毛ひっぱる母なし子 歌子
胸の鼓動おさえて別のことをいい 孝正
母性愛胸をはだけてはばからず 静水
かえり道野菊が胸でゆれている 愛鳩
胸に顔をずめて妓舌を出し 同
チンピラをおだてては胸を張り 凉人
ライバルへ秘さくは固く胸の内 杏花
女房は女房なりの胸算用 同
愛人の胸毛をいじる頬が燃え 十九平
胸襟を披いて肚をさぐり合 可住
胸張って歩く男に金があり 弘朗
女から見れば魅力のある胸毛 卯之助
満員車胸の高さに髪匂う 淀月

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

立川ペン先株式会社

大阪市東区常盤町一丁目十一番地

倍増論胸算用を反古にさせ 辰始
胸騒ぎ好きであったと意識する 圭水
セーラーの胸に女の芽が炎える 和二郎
胸の手をするうと逃げて酌へ立ち 幸雄
胸病むといえはスマートらしく見え どんたく
社長もう酔うたか胸毛見せたり 同
急変に最後の注射胸に打ち たいお
胸ぐらをとられて見たいひとりの 万竿
胸に一つあって低姿勢になり 判志
同じ夢胸にいだいてハイキング 句楽坊
BGの採否決定胸一つ 繁太郎
恋知りし胸の隆起に悩む日日 祥月
胸の傷秘めてお嫁にゆくとときめ 雪美
胸中を察して呉れとは勝手すぎ 萩路
胸算用くるったらしい靴の音 同
胸三寸におさめて相手と話合い ろ亭
胸に良い悪いは問わず喫む煙草 専翁
胸のうち語り尽くせぬもどかし 隆子

胸に持つうきをはらしによえ酒 寿美司
胸さわぎする手でうれしい切り 静波
胸中の焦りが鈍子 追加させ 同
胸勘定はずれ質屋を帰る道 滋菴
するするとのほり胸つまらぬ旗 千翁
胸三寸納めて不美味い酒に終え 九呂平
聴診器二八の胸があらわなり 同
娘の胸に届かぬ小さい母になり 藤波
長島と同じ胸毛があつて病み 宗太郎
胸病んでからの日記に血がかよ 同
胸病んで妻の移ぎで養われ 勝子
胸に手を当てりや感張れぬ新議員 圭井堂
手術した胸高原の旅に発ち 保夫
平身低頭胸にソロバンある限り 旭峯
親切な相手の胸をはかりかね 照子
面接がドアを開けて度胸きめ 李鳥
胸一杯不満をためて里帰り 惠二郎
胸倉を取つてねだれと伯父の知恵 同
遭難者わが子のような胸さわぎ 雅城
頼母しい胸毛さっぱり出世せず 雄声
胸の内とくと聞きたい膝枕 桂仙
胸の内お察しますと杯を受け 同
口げんかババが悪いと胸へ来る 生置
痛じやないかといわれてからは胸つかえ 同
殺人鬼やつとつかまり胸をなで 半月

とつ弁の弔辞へ胸が熱うなり 静水
一もつがある胸下座に来て坐り 可住
紋服の胸に不覚の妻揚子 淀月
国の名で呼ばれ胸毛のヘルメット 和三郎
初恋を胸に秘めたまま嫁ぎ 幸雄
胸に釘打たれる思ひ子にわびる 千翁
胸を病む女と見えぬ装身具 藤波
カレーならよしと子連れの胸算用 圭井堂

マスコミは胸毛のこともつけ加え 雄々
胸で泣き顔で笑うて夜を生き 惠二郎
親きつと敵さぬ恋を胸に秘め 雅城
母の手へ帰った記事に胸を撫で 八九寸
胸算用して見てイエスをノークラス 十九平
天
愛は過去憎しみだけが残る胸 旭峯
軸
安受けをする癖胸を叩くくせ

温室

早川清生選

温室で博士一生済んじまい 可住
温室に育ち巷の風笑い辰始
温室で匂うバインの実も熟し 勝子
温室の胡瓜可愛く寒の内 寿美司
生涯は暴風雨余生は温室 野迷路
温室育ちついで行けない新時代 照子
温室でせめてハワイを覗て帰り 凉人
温室で燕を停どめ冬越さず 隆史
温室にある車庫がある夢の家 万竿
温室もつけて旧家が売りに出る 雄声
温室に居居るつもりか秋の虫 圭井堂
温室に猫が一日眠りこけ 専翁
温室で見ても寒月冷たそう 桂仙
温室へ病気のひなも入れてやり たけお
温室で育てる様に恋育て 句楽坊
故郷より勝る温室錦蛇 繁太郎
温室かできて定年うれしが 繁太郎
折角の温室無理解な妻にあきれ 歌子
バナナたべられないと子にさとし 判志

温室に育ち老舗にしがみつ 和三郎
温室に月下美人の咲きはこる すみれ
温室の外に見事な寒椿 淀月
温室が並ぶここの暮しむき 愛鳩
温室に触れなば落ちん花咲かせ 可住
温室に咲いて外気にすぐ弱り 隆子
温室の西瓜をたべるふしあわせ 雄声
温室はビニール張りのおりよう 雪美
温室の外も温くげん陽の当たり 雅城
トンネルを出ると温室並ぶ村 萩路
台風の被害も温室知らん顔 静水
温室で狭い世間を温ういる 保夫
温室ぎつしりミドリ押し込まれ 李鳥
温室の椰子もの足らず伸びている 雄々
温室で寒暖計をまずのぞき 十九平
温室の鬼が新種をまた作り 静水
温室につづく母屋も総硝子 九呂平
温室にもどせば花は活きかえり 雅城
温室に咲いてもばらはばらの棘 光郎
親と子の意見が温室でも違い 藤波
温室で冷水摩擦する身分 惠二郎
温室も慌てふためくように萌え 千翁
温室へ慰めに来る如露の水 千翁
温室を出て太陽の下で枯れ 千翁
温室の唐椅子で書見する余生 藤波
温室の花にふしぎな花言葉 光郎
温室の花ライバルを意識せず 旭峰
暖房のデパート人の温室か 半月
温室のシャボンひどいけをつけ 九呂平
温室で育ち新嫁の胸で咲き 宗太郎
温室の無気味そよとも風が無し 惠二朗
温室の中でも水をやって 保夫
温室で移ぎ鳥の茄子を買い 宗太郎

温室へアロエを入れて秋終わる 萩路

佳

温室で育ち冷蔵庫でくらし 千翁
温室の世話大好きで女嫌い 晃男
本家より温室の棟高いこと 三五島
温室も電化野菜の値に頼り 卯之助
温室の病舎で治るがこわくなり どんたく
温室の花雄蕊が蝶を待ち 十九平
温室育ちで悪知恵だけはあり むじな
温室を物置がわりにして暮し 雄々
バットせぬ蘭が温室中に這い 淀月
温室へ散歩手真似で話しかけ 幸雄
温室の社長へ米客告げに来る 晃男

人

温室にふれず借景賞めちぎり 八九寸

地

東京がふくれ温室がふくれ 可住

天

温室の裏の銀杏は葉を散らす 李鳥

軸

温室の視察へ窓の眼がつづく

色紙短冊

書画用品

大坂あべの

丹月堂

電南セニセニ



入門講座

研究題「真似」

清水白柳

明けましてお目出度う。昨年は本講座のために、投句して頂いて御支援下さった方々や隆乍ら御声援下さったみなさんに厚く御礼申上げると共に、今後共御叱正賜わるよう御願い申上げます。さて申すまでもなく川柳は創作であって再現芸術ではないことを心掛けて行かねばならない。物真似ではないことに気づかねばいけないと思うのである。だから

真似うれる程の作品作りたし

ではないのである。川柳では「賞められる程の作品作りたし」でありたいと願っているのであることを申上げたい。併し

人真似の域からなかなか抜け切れず

弘朗

内弟子は見よう見真似で習

わされ

は封建的な感じでどうも頂けない。矢張り

お点前をほめれば真似ごと

というけんきよな気がうれしいのである。

1 ままごとに親を真似てる子に慌て

2 ママゴトが親を真似てる呑みつぶり

3 ままごとの帰日も酔うて居る

1の句の子に慌てる気持はよく判るのだがそれだけに終っているのが惜しい。2の句は呑みつぶりだけしか出されていなので3の句のパパの帰日もという具体的な現わし方にくらべて浅いといえるように思った。

父さんの音痴を真似て子が歌い

S

人真似が上手で出世のじゃ

S

パパの真似する子を囲み湧く笑い

父さんの音痴を真似ているという句には、真実味があるのだが下五文字の子が歌いと説明的になった処が頂けなかった。パパの真似する句には素直さがある。表現に

もう一つという感じではあるが素直さに救われている。

親の真似子はねそべって本

を読む

佳句である。子はねそべって

というのが活き活きと現わされているので苦笑している父親の姿までが浮き彫りされている。

大人では無いとて真似を意見され

西部劇今の孟母に行き処

吾を真似るむすこそれでもおこらねば

煙草でも喫うたのを意見されたのだろうと思うが、大人でもないのという句意に面白さがある。

西部劇の句は着想としては申分がないのだが表現に於て頂けなかった。この着想を骨子として考え直すといふ句になると思う。むすこの句は放蕩息子をむすことルビシであつたのだが放蕩と限定しない方が面白いのではないかと思う。

しかしそれでもおこらねばという句語は何か物足りないがゆい句語である。

人真似が上手で出世のじゃ

S

前句は大小屋が活きている

S

S

まになり

真似だけのうまい男でバツとせず

前の句の出世というのは古い言葉でそのために句全体がだれたように感じられて損をしている。後の句はスラリと出来ているので佳いと思う。

真似事でもと孝行せずじまい

句意は誠にいいのだが表現に少し難点があると思う。真似事でもとという三文字が句意をあいまいにして居るのではないかと考えたのでこれは真似事の孝行さえもせずじまいになるとハッキリするのではないだろうか。

成功譚なかなか真似の出来ぬこと

その通りなのだがこの句には感動がないといえる。その真似の出来来ないことを何とか真似でもしたという感動を句にしたいと思ふ。

真似だけでついてゆけない頭の差

下五文字の頭の差が惜しいと思う。これは矢張り頭の差と説明しないで頭の差を現わす句語を考えるべきではなかったかと思えた。

日曜大工隣の大小屋真似てみる

日曜日大工を真似て今日も暮れ

杏花

杏花

杏花

杏花

杏花

杏花

杏花

杏花

謹賀新春

田垣方大

食敷市水島寿町三丁目三一

川雑玉造文部

西田柳宏子

牛島水京

城一舟

井ノ下晴芽

大鶴喜由

大久保和三郎

田中烏雀

竹松九角

小林亀一

平井絵丘

平岩司郎

本儀親生

柳

川

し、後の句は今日も暮れと叙した
処がよいと思う。

クラス会辭真似られて師苦
笑 光 道

学ぶとは真似ろか口調まで
うつり 弘 村

クラス会の句は下五文字の師苦
笑が一寸気になったがこれでもい
いだろうと思う。学ぶとはの句は
佳句だと思ふ。風刺の鋭さと表
現がマッチして立派な句にな
っている。

先生の台詞そのまま幼稚園
Y

子煩悩子供の真似で朝を起
き 初 甫

泣き真似をすれば泣いてた
子が叩き 静 水

幼稚園の園児が先生の口真似を
するのなら台詞という語が生きて
いない。母親が先生の言葉を真似
るといふようにも考えられる点に
弱いところがあると思う。子煩悩
の句はいい句だと思った、朗らか
な朝の雰囲気がよく現わされてい
るのにひかれた句である。泣き真
似の句にもその情景が巧みにキ
ャッチされていてその背景にある姿
が感じられるのでこの句にもひか
れたのである。

体質がどうであらうと枸杞
ブーム 八 郎

社会性のある句であるが一步誤
まると時事川柳となり、いのちの
短い句になりそうな気がする。つ

まり枸杞ブームが消えてしまふと
共に消えてゆく句だといえそうな
のである。

方言を真似て笑わせ宮田輝
八九寸

この句の宮田輝は面白いと思
う。NHKでの宮田輝の存在が大
きいだけにこの句は動かないもの
になったのであると思う。

真似したく有金はたいて鹿
島立ち みさ子

恐らく温泉にでも行くのだろう



と思った。この句のポイント是有
金はたいての中八文字にあるのだ
が一字多いのも気にならない程ピ
ツタリしているのである。

真似出来ぬとこを職人自慢
する 宗 義

職人の心意気を詠んで成功して
いる句である。

真似られた品へ老舗が落つ
かず 幸 雄

登録商標がとつてあるのにそれ
を真似られては堪らないと訴訟に
まで持ちこんだといったケースを
詠んだのだと思った。

先人を真似て発明若を偲び
H

真似でない証拠に特許もろ
ていた 辰 始

前の句は前半と後半がバラバラ
のような気がする。「先人を真似
て」と「発明若を偲び」とが別別
の方向に向いているので作意は判
るのだが一句として成り立ってい
ないように思った。後の句にはユ
ーモアがある。軽いタッチの表現
で成功しているように考えられる
のである。

その上に真似までされて居
たまらず 静 水

その上という句語は深いもの
を持つている。そのために句意を
一そう深くしたのである。

真似られて居るとも知らず
酒を受け 周 甫

酌ぐ真似を飲む真似にして
返す猪口 和 三郎

申し分のない句で、句意は言う
までもないと思う。課題もこま
ま消化されるとたのしいものであ
る。

死んだ真似いのちは惜しい
虫の知恵 和 三郎

自然というものは恐しいもので

ある。天敵というものがあつて本
能的に身を守る術を持つているの
だそうであるが、川柳家はそれを
いのちが惜しいと感じたのであ
る。

真似をして居たらひよっこ
りふりむかれ 静 水

川柳らしい川柳だといったらお
かしいかも知れないが私の好む境
地を句に詠んで居られるので特に
心をひかれた句である。

ぶつ真似も見せて父娘の仲
のよさ 万 竿

恋の芽を言い当てられて叩
く真似 和 三郎

前の句は軽いタッチで描かれた
スケッチであり、後の句は巧みな
句語を使って仕立てられた句であ
る。そのどちらもそれぞれの良さ
を持つていると思う。

仏弟子に真似て寺院に住む
俗僧 K

仏弟子に真似てというの自分
を卑下して言うて居られるのだと
思うが、その真意が後の俗僧にま
で感じが届いていないように思
うので考え直す必要があるのでは
ないかと感じた。

飲む真似をして女房に叱ら
れる 白 柳

次回研究題 「肩」

五句以内 〆切 一月二十日

発表 三月号の予定

宛先 大阪府南河内郡美原町丹

上四〇四 清水 白柳

小児科・沢田医院

沢田 四郎作

大阪市西成区
玉出本通り一ノ二三
電話 〇二九一三

木村 匡利

號水洞

躬和子

恭共子

夫共子

倬共子

三

大阪府東淀川区
十八条町二丁目二一

川柳雑誌社

岡 山 支 部

木次支部

藤井 明朗

島根県大原郡木次町

布 部 幸 男

京都市二条高倉西

電話 〇五 5464

丹波屋

戸倉 普 天

兵庫県水上郡水上町小野

小児科・沢田医院

沢田 四郎作

大阪市西成区
玉出本通り一ノ二三
電話 〇二九一三

柳界展望

句会

▼本社新春句会は七日午後六時から千日前電停前自安寺で開催。恒例の短冊交換会もあること故、柳友お誘いの上多数のご出席をお願いする。▼南区医師会文化部吉林忘年句会（大阪市）は十二月二十五日（水）午後七時半から島の内「蝶六」で開催。▼大阪通信病院川柳会忘年句会は九日（月）午後五時から新世界の「三好」で開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は十二月十三日（金）午後五時半からコクヨ株式会社社会議室で開催。▼南海電鉄句会（大阪市）は十二月十九日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。▼七面短詩文学クラブ川柳部新春句会は一、月三日奥新和歌の浦、魚又楼で開催される。以上路郎主幹出席。

▼川維岡山支部十一月例会は十六日（土）久米雄居で開催。▼富柳会（富田林市）師走句会は十二月七日午後一時から富田林市民館で開催。▼名古屋西區民川柳大会は十一月十七日富士銀行三階で開催。▼幸菱川柳会（名古屋）秋の吟行は十一月十七日鹿乗荘で開催。▼川維篠山支部（兵庫県）忘年句会は十四日午後一時から遠山可住居で開催。▼第十二回かはる



（十一月二十四日）
市文化祭川柳大会で挨拶する
川維岡山支部長 八木摩太郎氏

会川柳と俳句の会（東京都）は、阿部佐保蘭著句集「鶴の姿」出版記念句会を兼ねて昭和三十一年一月十二日（日）正午から小石川後樂園涵徳亭で開催。▼新年交歓三

自宅で食養生をしながら新年を迎えられることとなった。手紙で、「日頃不養生の小生のため路郎先生が、医者の退院許可があってもなお一週間程は病院で療養するようにとご教示下さいましたが、何分病床が足らぬ上、次々入院ではじっとしても居られず予定より三日遅らした後、トコロ返しに退院しました」と。▼阿部佐保蘭氏（東京都）から、川柳雑誌十一月号落掌、先生の窓口談義「句集は作家の魂の顕現」には教えられるところがありました。私も句集「鶴の姿」を出して見て後であすれば良かったと悔い、点が多々出て来ましたが、非売品とも考えました。

十六題川柳大会（広島市）は昭和三十一年一月十二日（日）午前十時から広島市中島町平和公園内平和記念館二階会議室で開催。詳細は広島川柳会へ。▼川上三太郎著「孤独地蔵」の売切れを祝う会が箱根湯本の双子園で開かれ、三十二人の川柳人が深夜まで歓を共にされた。

消息

▼土井文雄氏（大阪市）は十一月初旬高津病院で胃の手術をされたが経過順調で同月中旬退院され、

ごさいました」と。▼富士野鞍馬氏（東京都）は「二百年光る俳風柳多留」の句を寄せられた。▼米沢晴明氏（大洲市）は十一月十二日九州若戸大橋から湯田温泉泊り、二十三日は秋芳洞を見学された。女の先生十三人、男子七人、団体として女子の多いのが特長です。▼「連休へ難儀覚悟の旅づかれ」▼藤野福雄氏（箕面市）は十一月末で毎日新聞社名譽職員の処遇をうけ定年退職されることとなった。▼西貝篤氏（須坂市）は、中島紫痴郎著「行く水」の刊行と刊行祝賀会に尽力されていたのが一段落し、なんだか舟底へ引き込まれるような信州の雪がそこまでやって来たような感じがしております。

▼西いわを氏（羽曳野市）は羽曳野病院で療養中だが、この程五病棟五号室の個室へ転室された。▼古川静波氏（羽曳野市）から、大阪府立羽曳野病院第十一回芸術祭は十月十九日から二十四日まで六日間、院内講堂で開催、川柳の部の展示が一番豪華で好評を得たと。どんぐり川柳会指導の川村好郎氏「一式すめば別居どころかこき使

新発売



銘酒
白牡丹
はくぼたん
180 ml

青キヤップ

中味 **40**円
空ビン引取10円

造酒津撮

新年宴会

には
あたたかい
すき焼と 鍋料理
もみじの名所

竜田大橋下車

本つる

電話竜田一六二

料理は一流値は三流
酌は有芸仲居揃い

竹青の店

謹賀新春

大阪形水

大阪市東区糸屋町
一ノ二

い」を、入院中の西いわを氏は



露披取名の花潮柳若
改題と花柳露披氏が
披露する、花潮柳若
氏（十一月十七日）

「豊ほど良きものはなし寝ころばん」の作品をそれぞれ出品された。▼小泉紫峰氏（八戸市）は十一月三日第一回八戸文化褒賞を授賞されたのを記念して第二句集「若の花」を刊行予定とのこと。▼橋高薫風子氏（大阪市）は次女幸さんの作品が、豊中市の第七回小中学児童画展幼稚園児の部に展覧され、三才児の作品は唯二人のこととて大いに親馬鹿ぶりを発揮された。▼国弘半休氏（下関市）は十一月二十五日から約一週間、関西仏利巡りの団体に添乗して高野山・東大寺・本願寺等参詣の旅をされた。「川柳雑誌」は私の旅行の友でこれ一冊で夜行も楽しいです。▼須藤俊江さん（高知市）から、「生々庵先生が十一月十七日米高された由を伺い、お会い出来ず残念でなりません。よろしくお伝え下さい」と。▼吉川亜人氏（山口県）から、「路郎先生相変らず柳界の為に尽力深く感謝いたします。豊乃奥様には子供等大変

世話に成りましたが、二男は広島で会社を組織し社長格です」▼山内静水氏（竹原市）は不朽洞会員に推薦された新年を機に竹原川柳界の発展のため益々尽力、新人育成、句報の充実などを期しておられる。▼木山遠二氏（等岡市）は福山国立病院に入院病氣療養中であつたが、近日退院との朗報を十一月二十日寄信された。▼河相すむ氏（西宮市）は十二月一日から甲府・東京へ出張、六日帰阪され、直ちに本社忘年句会にかけつけるといふ多忙さだったが、句はゆつくりと車中で練りましたからと自信ありげに話しておられた。▼川岡露眼子氏（諫早市）は長崎時事新聞の川柳の選を担当しておられるが、先生には親不孝したような暇時から戦後にかけての十年余のプランクが今更ら影響しているようで、勉強勉強とばかり家業に忙しい身を励ましておられる。▼橋高薫風子氏（大阪市）は十二月十五日伊勢神宮に参拝、二見ヶ

浦を散策、久しぶりの冬の海に浩然の気を養われた▼山路閑古氏（東京都）は十月一日、「鳴立」を発行。鳴立庵俳話・鳴立庵選句など掲載されている。▼川竹松風氏（高知市）は十一月米高の中島生々庵氏と柳友を交えて歓迎交歓されたが、当夜一賞玩戴いた土佐

新春を賀し奉る

川柳雑誌社

麻生路郎 麻生葎乃 中島生々庵 編集局
北川春巢 戸田古方 清水白柳 真鍋一瓢 橋高薫風子
西田柳宏子 浅川八郎 句会部 黒川紫香 菊田いさむ
八木摩太郎 林宏子 総務部

のたたき・はしけん・しばてん音頭はとも角、柳友の飲みつぶりのお付き合いにはお骨の折れたことでしょうか、酒所高知ならではある。

▼阿部佐保蘭著「鶴の姿」が昭和三十八年十二月一日東京都中野区鷺宮二八四阿部佐保蘭氏方から発行された。（後川柳雑誌22ページ参照）▼

時実新子著「新子」が昭和三十八年十二月一日姫路市野里月丘町二七戸田静古氏方川柳ふあうすとひめじの会から発行された。あとがきに著者は「人間とは何という孤独ないきものなのではないか。にんげんという底知れぬ魔物、新子という一個の女のやりきれない存在を……云々と」ある通り、女を、彼女自身を新しい感覚で追究している。「月のかさめぐり逢わねばただの暈」「足裏に火を踏む恋のまっしぐら」川上三太郎・房川素生両先生の序がある。B六版百二十二頁、定価三百円。

▼八木摩太郎氏（堺市）の三男良雄氏は河内長野市日野、久保多英夫氏次女智子さんと婚約整い、十一月十七日午後二時から羽衣「新東洋」で神式にて華燭の典を挙げられた。

不朽洞会から

★新会員紹介

十二月 山内静水（竹原市）正

▼昭和三十八年度本社句会 全出席者（敬称略）

生々庵・梅里・すすむ・白柳・専翁・八郎・静馬・文秋・柳宏子・南佑・舟遊

不朽洞賞杯受賞者
旅風・水京・どんたく・東天紅・保美・梅里・与呂志・三司・摩太郎・瓢太・静馬・珠笑



コクヨ
便箋



み

んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス



積水化学
本社 大阪市北区宗室町1

金 泥 集

課題「赤電話」

麻生 葭乃 選

赤電話尻すれすれをスクーター
赤電話尻眼で道ゆく女を見
赤電話はなれた処へかけにゆき
出先から嘘をついてる赤電話
赤電話切符を二枚握りしめ
赤電話助言の言うた通りかけ
タバコ屋のマダムがきれいな赤電話
赤電話あとがつかえる長話し
居所を言わずに切れた赤電話
赤電話一〇番へ協力す
三分で済ませて欲しい赤電話
赤電話誘拐犯に利用され
赤電話自宅へかける嘘になり
母さんに内緒の人へ赤電話
一人去り二人去り赤電話の長話
赤電話あわてて切って言い残し
酔いどれに手こずっている赤電話
赤電話しなつくってんのがじつは
赤電話十田玉が見つからず
甘えたりすねたり赤電話待たされる
ロマンスの初めを知ってる赤電話
赤電話おばあちゃんの小づかいだけかき
俄雨ボックスの中で雨やどり
赤電話女同志できりつかず
赤電話据えて客足グッと増え
待つ長さおじぎまでして赤電話
赤電話公用私用入り乱れ
赤電話次にならば言いそびれ
ひとの気も知らずにながい赤電話
十円で恋のささやき赤電話
赤電話村に一つがボスの家
月給日パパとデイトの赤電話
青勝周寿同夢弥正俊清同あい喜栄子茶

次回題「裏口」メ切一月末日

柳志寸言



本田 柳志

◇てにをは、はマツチの様なもの
である。大事に扱えば重宝だが、
ぞんざいに扱うと致命的である。

×

◇一つ一つのことは、何とされ
いな事よ。組み合わせられたことは
の、何ときたない事よ。

×

◇川柳は必要でないことばを多く
並べる事ではない。必要なことば
が一つあれば
沢山だ。

×

◇洋服でもこ
とばでも、レ
ディーメイド
では個性は出
しにくいもの
だ。

×

◇きれいな衣
裳をまとった
からといって
金持ちともか
しこいとも限
らない。

◇文章やことばは何らかのエイキ
ョウを他人に及ぼすものである。
何のエイキョウも及さばない様
な、ことばや文章は口にすべきで
ない。

×

◇古い革袋に新しい酒を盛るのが
川柳である。

×

◇考えてから走るべきか、走って
から考えるべきかは、詳しく考え
る必要がある。

×

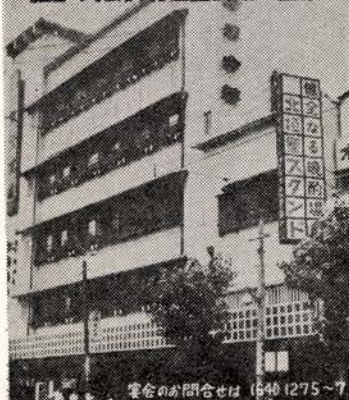
◇叩かれて痛いのは生きている証
拠であり、けなされて腹が立つの
は、進歩の証拠である。

×

◇偶然に天にぬける事はあつて
も、偶然に没になる事はない。

大阪 北極星 直営営業所

民芸調北極星会館の全景＝



会館の問合せは (640) 275-7

白浜温泉 やわらぎ 白浜温泉
大正橋 やわらぎ 一六七
永楽橋 やわらぎ 二六八
野田阪神 やわらぎ 二六六
野田阪神 やわらぎ 二六六
また町 パンヤの食堂 二四六
パンヤの食堂 二四六
また町 パンヤの食堂 二四六

謹賀新春

橋高薫風子

大阪市北区堂島上二ノ五二



大萬川柳

「麻薬」

入選発表

選者 麻生路郎先生
 投句総数 四百十三句
 入選 三十九句

八尾 弥生

明眸の底に冷たい麻薬秘め

枚方 珠笑

麻薬でも出そうナサングラスの靴

大阪 薫風子

夜の女ヤクを乳房の谷間から

大阪 保夫

かくしカメラ麻薬の桶さ知っている

泉南 美恵子

悪徳の麻薬ビースの隅を借り

大阪 野迷路

恋しくて憎い麻薬のようなヒモ

大阪 弘村

観賞用のけしの花にも警吏の眼

加賀 光郎

阿片罂芋虫並べたように嗅い

岡山 宗義

西成に住んで麻薬の名も知らず

米子 雄々

香港に本妻がいる麻薬王

笠岡 真奇

自滅した麻薬の父に声もなし

芦屋 一十

いつしかに麻薬砂糖に化けており

大阪 小松園

家出した同志ヒロポン打ちあつて

岡山 東岸

打っている顔を刑事が見のがさず

見島 恵二朗

白い粉な肉と換えても欲しい粉な

倉敷 方大

おとこ酒ニコチン麻薬次はム所

大阪 晃

ペーかくすのに聖典をくりぬいて

津和野 きさ子

麻薬団上陸霧の濃い港

大阪 柳志

罍を辞めてみたらわかつた麻薬ボス

大阪 文蝶

麻薬ボス口の怪るさへ釘をさし

大阪 生薑

麻薬ボスこまで米いの金をとり

大阪 生薑

親殿る力はある麻薬呆け

ぬかりなく羽田を発つた麻薬犯

笠岡 桃里

顔二つ三つ重なって麻酔さめ

ヤクを追う私服を羽田から立たせ

大阪 春巢

モヒ中の過去を時々鼻にかけ

栗 素郎

運び屋もヒロイン注射して出かけ

神戸 静馬

ヒロインが平和の裏を撫でにくる

神戸 静馬

借金のかせが麻薬に似て抜けず

神戸 静馬

ポン中のようにバチンコやめられず

神戸 静馬

耳かきはどら麻薬に人間喪失してしまい

神戸 静馬

哲学がなくなつてゆき芥子の精

大阪 小松園

ヒロポンの金とは知れど義理の母

栗 圭井堂

親切に持つてやつたが麻薬とは

倉敷 方大

麻薬ルート砂漠の河のように消え

津和野 きさ子

麻薬知りそめてダイヤも只の石

大阪 薫風子

春聯に紅に阿片の遠き夢

見島 恵二朗

運び屋のゆうゆう散歩の顔でゆく

見島 恵二朗

ヤク持つて鳩の白を見えていない

大阪 水客

大萬川柳ベストテン(十二月発表)

一 薫風子 二七、五大阪

二 梅里 二四、五大阪

三 方大 一九、〇倉敷

四 水客 一八、五大阪

五 恵二朗 一六、〇見島

六 好郎 一五、五泉北

七 晃 一四、五大阪

八 柳志 一四、〇大阪

九 文蝶 一三、五大阪

一〇 素郎 一三、〇堺

一一 東岸 一二、五岡山

一二 遠二 一二、〇岡

一三 圭井堂 一二、〇堺

一四 良 一一、〇大阪

一五 きさ子 一〇、五岸和田

一六 静馬 一〇、五神戸

一七 阿茶 一〇、五大阪

一八 桃里 一〇、五岡

一九 春巢 一〇、〇大阪

二〇 真奇 一〇、〇岡

(以下懸)

次ぎの兼題「美少年」 五句以内

〆切 一月十日

発表 一月二十日

二月の予告「波の音」

〆切 二月十日

発表 二月二十日

投句先

大阪市阿倍野区松崎町三ノ二〇

大萬川柳會

明けましてお芽出とうございます

麻生路郎先生選

大萬川柳會

投句ご希望の方は

大阪市阿倍野区松崎町3の10 松江梅里方へ

いのちある句を創れ



投稿規定
 用紙は原稿用紙、文字は正
 確、締切毎月十五日、投稿先
 本社宛

忘年川柳大会（大阪市）

12月6日 午後5時

会場——千日前 自安寺

本年掉尾を飾る本社の忘年句会、来るは来るは、ベテラン、新鋭、古豪の常連、飛込みの人、久々の人々、賑かな忘年川柳句会である。

トップを切つて、中島生々庵博士の挨拶は、人造りは、結局は「思いやり」の一語につくる。妻は夫を、親は子と思う至情は、思いやりであり、師弟の情、川柳家の句箋にのせる。——若し、われが彼の立場であつたら——の思いやりは人造りで、人格造就であると説かれ、我々の恩師、麻生先生ご夫妻のご健康を祝福された。

清水白柳氏の句評は旅の句から拾つて生々庵、珠笑、多久志、薫風子、あいき、柳宏子、の各氏の句を評された後、支部対抗句会に移り、ベテラン菊沢小松園氏が軍配をあげる行司役。支部の応援で遂に第一位、玉造支部の西田柳宏子、第二位大鉄支部の正本水客両氏の獲得するところとなり、雪月花句会は花組の大勝で雪、月を押し切った。席、兼題の披露に移り、名吟佳什に耳傾けて、成程な

あとうなずかせるさま、流石忘年句会風景であつた。秀句には豪華な賞品盛沢山で目を見はらせる状況であつた。

忘年懇親宴のトップは、丸紅川柳会の村田瓢太氏の奇術で、これは友人芸かと思せる位で川維余興部の至宝の一人。続いて西田柳宏子の尺八「千鳥」に耳を傾ける。柳生野菜氏の名古屋甚句はどうにいったもの、しろうとの文化財だといって笑わせる。岩本素人氏の久振りの来会に、余興で花を添えられ、「秋の夜」の口三味線で立派な明治生れの遊女が面がかれて拍手もしばしなり止まず。その次の女流代表メ女さんの落ち着いた態度で、北から南へ各地の民謡に酒傾けて聞きはれる。メ女さんならではでの見事さ。最後はのど自慢、鐘三つの常連松江梅里氏で千秋楽の打止め。時に午後九時過。（摩）

出席者——路郎、摩太郎、圭水、生々庵、珠笑、素人、柳宏子、野菜、千代、八郎、静馬、一十、好郎、黙平、仲字、水客、専翁、太路、市郎、万葉、白柳、瓢太、進之助、多久志、計光、古方、井平、水京、みさ子、薫風子、小松園、一栄、清子、瑞歩、句菜坊、秀子、いさむ、一舟、メ女、行人、唐佑、礼子、すすむ、形水、文秋、天樹、夢虹、舟遊、和子、旅風、野迷路、梅里、霞乃、

兼題「質素」 麻生路郎選

当り前を世間質素の部に入れるクラス会女優質素な素顔で来腐る程持つて質素を通り越し質素なる暮しに有れど夢捨てず真心が質素ににじむお人柄あみかえてあみかそ着る母達者松下さん質素にせんでも有り余りドライには禅尼の教えもしんとすためるが趣味で質素も身について質素なれども野菜サラダが美しい質素にとのこして死んだわけなし恩給で食べて質素に菊を活けけちやないもつたない質素にし出すときは出して質素に余生隙きのない旧家質素な庭構え一菜一汁これも楽しい夕の膳成金の質素ケチ臭く見られ遣言と言うて質素に出す葬儀ご質素に元宮様というくらし立志伝の妻は質素なままで死に質素なくらし仏壇だけ光つとりうりざね顔質素な家に生れて来上京の母驚かす冷蔵庫

兼題「ニユース」 若本多久志選

井戸端のニユースははたに嫁が来るライバルが不渡り喰つたいニユース一面を飾るニユースは泣く写真長鳴のニユースはフアンへ早いこと井戸端のニユースはハズの棚おろし谷底にニユースの車錆びたまま採めを待つニユースカメラを位置にすえ電光ニユース見たところから見たところええニユースないかないかとところ手大ニユース世界の株主ちやがつかせビッグニユースニユースで朝の更衣室現場見た事故がニユースにない不満

主井堂 珠笑 井平 千代 計光 静馬 多久志 文秋 薫風子 形水 舟遊 唐佑 すすむ 天樹 進之助 柳宏子 井平 多久志 夢虹 水京 珠笑 宗義 滋雀 旅風 雄々 八九寸 天樹 生々庵 阿茶 静馬 いさむ 珠笑

ニユースにもならず師走へ善意の灯ニツボンのニユース日本の水恋し馳け出しがビッグニユースを拾つて来台風のニユース小さい方がよしニユース解説首相の痛い処をつき三面の隅でトラック轢き殺し大ニユース俺に彼女のある噂大臣を申し訳けなくするニユース少年Aも今日はニユースで大写しこれというわが家にニユースなで無事本宅の焼けたを二号の室で聞く時報後のアナのニユースに耳を立てニユースもう世界を狭いものに作る被害者に非情のニユース追いかけるスガッサーの御厚意臨時ニユース聞くそれぞれのニユース夕餉を楽しませ宇宙船の電波に奇しくもある悲報犯人が三面記事を見逃さずうちの子がニユースの中にいるニユース特ダネのその後を訪えば鶏を飼い早耳が半分かじつて来たニユースお人好し古いニユースを持ちあるき一発の凶弾世界に飛ぶニユース湯気の立つ様なニユースを掴んで来十大ニユースの一つに我に洗濯機いいニユースだつと栄転の噂聞く

兼題「空果」 川村好郎選

吉日を前に用捨もない空果去にがけの駄賃に空果飯を食い病人が寝て居て空果気が変わり連休へ空果かせぎをふんでみる不景気が空果のかせぎまでひびき空果見舞結局空果をはめて去に空果から見れば何にもならぬ鍵這入られて空果の勘に呆れ果て空果からプライバシーを覗かれる

舟遊 古方 阿茶 静馬 進之助 好郎 生々庵 文秋 主井堂 静馬 野菜 繁太郎 形水 瑞歩 進之助 一舟 一栄 水客 柳宏子 小松園 天樹 素人 進之助 多久志 雄々 素人 唐佑 水京 生々庵 進之助 主井堂 太路

つかいこみ空巢に罪を負はしこき
 さすが空巢へそくりまもつたらしい
 空巢今日戸締りまちりして出かけ
 ジャレてくる小猫を空巢もてあまじ
 元どおり空巢戸締りしてかえり
 露路口で空巢と知らず擦れ違い
 旅先でお熱い頃に空巢入り
 一揃いやつと出来たらまた空巢
 すきのないくらしに空巢ゴッとする
 気楽さは空巢にやられる物もなし
 電報へ空巢留守居の額で出る
 空巢より恐い息子に悩まされ
 十二月空巢も居直る覚悟出来
 空巢の手一度は触れてみた古壺
 落葉コロコロ空巢の足にまといつき
 空巢にはいられボリスにや叱られる
 空巢届出させて空巢そのまんま
 兼題「チップ」 正本水客選

チップ出す手許へ妻の眼が光り
 チップにも西と東の性が見え
 チップ全廃くれはる人にはだまつく
 けちくさい釣銭をチップに手を握り
 ボックスを深してチップ出す素振り
 例外のチップで宿を慌てさせ
 チップだけのサービスマンとておき
 チップだけ取って仲居は顔出さず
 チップまでおいて帰った黒眼鏡
 背任の金でおします切るチップ
 糸切歯きれいでチップはずんどき
 クーボンの客のチップはあてにせず
 チップはずみずて夫婦でないとうたぐられ
 チップみないな収入ばかりあてにして
 チップにも受取りの要る社用族
 帯をした札から一枚切るチップ
 手なれた幹事のチップ手なれた手を受ける
 日本のボリスさんチップに面喰い

半月
 清子
 多志
 静馬
 小松園
 瑞歩
 専翁
 古方
 清子
 珠笑
 一舟
 珠笑
 旅風
 水客
 柳宏子
 好郎
 幸雄
 すみれ
 宗義
 旅風
 白柳
 井平
 みさ子
 句楽坊
 好郎
 舟遊
 生々庵
 一十
 夢虹
 古方
 天樹
 市郎
 生々庵
 瑞歩

洋行はチップチップで気が疲れ
 チップ出す顔をホステス心得る
 大安のチップ白足袋よく動き
 千慮の一失チップから足がつき
 取引がすんでほんのチップ出し
 いちち好き客は何時でもチップ
 はりこんだばかりにチップ馬鹿にされ
 帯解けば今日のチップの稼ぎ高
 チップおきあつたり帰る手も使い
 只とれたようなチップを惜しくなり
 二度と来ぬところへもつけないチップ
 大勢で飲んで騒いでノーチップ
 運命は娘もチップぐらしする
 チップまで出してもらって二日酔
 惚れていってチップ貰うも気が引ける
 チップ別に用意して夫婦の旅にいる
 兼題「転宅」 菊田いさむ選

額ひとつ釣って転宅屋にする
 転宅に植木隣りへもらわれる
 丁寧に転宅先の地図を張り
 新築移転古い道具が目立ちすぎ
 左遷とは言わず転宅祝われる
 転宅の貨物へ合乗りする娘
 落ち目とも知らず転宅羨まれ
 転宅へきつちり借金取りが来る
 栄転の荷造り賑やかな笑い声
 転宅へ仔犬は乗用車で運び
 請求書転宅先まで附箋で来
 転宅の便利市場と風呂近し
 転宅を余儀なくされた行きつり
 ええこへ越しか案内派手に来る
 転宅の通知をかねた年賀状
 年末の転宅夜逃げかと思われ
 転宅に火鉢の灰は捨てて出る
 転宅の挨拶どこの国訛り
 引越した当座は雨が耳につき

万来
 摩太郎
 阿茶
 一舟
 小松園
 すすむ
 太路
 好郎
 柳宏子
 一十
 圭井堂
 阿茶
 みさ子
 素人
 水客
 古方
 静馬
 市郎
 静馬
 清水
 専翁
 生々庵
 柳宏子
 清子
 生々庵
 多志
 万来
 清子
 仲字呂
 夢虹
 専翁
 野菜
 万来
 水客

転宅にガラクタ思い切れぬ母
 表札を最後外し転宅し
 独身の転宅リヤカーで越してくる
 兼題「場末」 金泉万来選

浮動票場末のボスが二にぎり
 場末にもシンジャラジラの音がする
 場末には場末のよさと三次会
 旅に出てまでも場末をゆく男
 ブルジョアの知らぬ場末の味に住み
 場末から都心へ通う爪を塗り
 場末から通うホステスに見え
 夜逃げして場末銀座で旗ざあげ
 場末にも学者の住んだ誇らしさ
 行き届く市政に場末見直され
 餅搗きは場末の方が景気よし
 樂局がここだけ明い場末の灯
 火葬場の跡が開けて来た場末
 喰うだけは喰える場末の肉内職
 場末には惜しい屋台の娘の愛想
 場末とは儲け達者のすむところ
 まきぞえは場末の月を見て帰る
 善行が場末の朝を明るくし
 場末に住んでいるから場末の顔になり
 場末まで来てスピードに引つかり
 場末まで落ちたが屋号そのまんま
 鈴蘭灯をつけて場末も売出す気
 明治から場末に住んで顔が利き
 支店長代理場末で店も掃き
 スマートな工場になつた場末
 ここからは場末市バスのまわれ右
 裏切った人に出合つた場末の灯
 定年に建てた場末に住み馴れる

万来
 市郎
 いさむ
 千代
 珠笑
 旅風
 進之助
 一十
 野迷路
 計光
 仲字呂
 専翁
 すすむ
 太路
 いさむ
 天樹
 生々庵
 水客
 すすむ
 生々庵
 好郎
 好郎
 一栄
 白柳
 珠笑
 古方
 進之助
 夢虹
 万来

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区深藏町5 (361) 9373代

支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (291) 9629代

名古屋昭和区村田町2 (88) 9069

上役の見て見ぬ振りがよく応え
 肝心のつばを外した三の糸
 名門を言わず語らず鼻にかけ
 名門の見栄が裸になりきれず
 骨盤に身の振り方を尋ねたい
 着くずれて昔に遠い人とすれ
 みられては拙いお方とすれ違い
 社内公認二人だけにさせておく
 スピード化間一髪のすれ違い
 立読みを大目に見とく程のひま
 無免許をドキンとさせたすれ違い
 名門に生れ世間を狭う住み
 名門と言わされるだけにある折目
 骨おしみののがパレる出来上り
 昇給の不満がさせる骨おし
 目をつけた娘だけ大目に見る社長
 資本家を肥やさぬように骨おし
 赤門を出たブライドが邪魔になり
 ひろい物に見える処が思うつぼ
 すれ違いウイंकされたかと思
 ども息子骨おしにも胸に入り
 骨おし悪いところに監視の目
 おこらせよおこつて思いうつば
 公認の数ほど当選してくれず

梅里
 柳宏子
 生薑
 静馬
 小松園
 市郎
 圭井堂
 東天紅
 清子
 文秋
 好郎
 一栄
 弥生
 白柳
 幸雄
 紫水
 専翁
 柳志
 一舟
 泉睦
 悦子
 双楽
 八郎
 請一

ニコヨンは腹空かぬ穴を掘り
 野菜
 金井文秋報

白バイも美人の追ひこし大目に見
先生のマージャン大目にみくく
名門の荷が重すぎる不肖の子
骨おしみと見られたい良い返事
骨おしみ見える所を掃いただけ

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

丸う育つとこを皆でいびつにし
よう焼けたサザエの蓋をとりあふ
ふたあけて見れば招待客ばかり
大丈夫と思うた蓋を猫があけ
ひろがった噂へふたの術もなし
冷えこみに熱燗の味更によし
冷えこみがもう節々へやつてく
冷えこみへ嫁のスカート母案じ
サーピスをまともに受けぬへをまり
味で売店サーピスの悪いこと
ハワイ着アメリカガールキツス呉れ
優勝に揚がる国旗へ出る涙
うちだけの国旗が近所よく目立ち
床しきは国旗の前に立つ和服
傷兵の回顧へ揺れる旗の波
連絡なし不吉な予感部屋に充つ
ターミナル連絡場所マゴマゴし
連絡先やつと探せば他人が居
十四ですむ連絡をしてくれず
別居した娘の女房へ子が通い

川維 京都支部句会 (京都市)

田中烏雀報

拇印押す母を背中の子のぞく
警察で頭をかいた手で拇印
宣誓書へ拇印守衛が持ちそえる

みじめさを拇印のあとの指に知る
牧師さんの金歯が光り親しめず
手をあげて横断道路行く牧師
祭壇の灯を消す時私を祈る牧師
黒い牧師あなた公孫樹の下歩く
裸電球の下の牧師さんと二人の男
女の耳刺る理髪師は弱くなる
枕そーと白湯の湯気視てる
秀吉も白湯呑まされた茶寺くれん

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

新築へ妻の手腕も買ってやり
末っ子が嫁ぎ余生という笑顔
狭い狭い室で婆ちゃん読経する
我を通す癖が余生を狭くする
生き過ぎて余生は養老院で持て余し
七十の手習い余生も亦楽し
神技の様な手腕でビルが建ち
座して食う筈の余生へ孫が出来
民主主義手腕買われて若社長
手腕家のややオーバーに絡んで
あの顔での凄腕を見直され
手腕なく平のまなまで定年期
寄って来る孫にせめられ嬉しがり
その手腕惜しいですとねおだて上げ
女房のやりくる手腕に頭が下がり
粒々辛苦貯めて余生を羨まれ
信心の余生未来に向いている
手腕家のまんまとかかる自己の網
手腕家といわれ義理の借りが殖え
気苦勞な余生後妻の若すぎて

川維 出雲支部句会 (出雲市)

泉

尼 緑之助報

子と意見別れて選挙所へ向い
大阪弁本場と違うアクセント
汚職などしない顔して選挙ビラ
御用材木曾が積み出す本場物
代理者の演説やはり票が逃げ
ふく料理本場の浪を聞いて呑み

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

秋の酒心の底にふれかかり
御先祖に見せたい今日の晴れ姿
挨拶を目と目でかわす通勤車
母の座にでんと座って妻つよし
御先祖をまつれと病人気がより
試運転レールのさびが少し取れ



市長今日テープを切った試運転
特価品売場で要らぬ物を買う
買物を大事に母がぬれてくる
お父様月賦ですと妻はいい
清貧に育った友に助けられ
啄木に似た清貧の骨太し
清貧へ親類中がよりつかず
清貧の家に入った子が生れ
清貧を聖人などと敬遠し
長々と代理の祝辞がまだ続き
親友の祝辞悪口並べたて
祝辞とは空しきもので早よ飲ませ
ハラハラさせる祝辞がやつとすみ

川維 木次支部句会 (島根県)

あやめ

八木摩天郎報

人柄に似合はぬ菊の出来を見せ
知事賞の菊が疲れたような顔
菊化展菊の香りに酔うて出る
菊豪華秋の陽ざしへはね返り
秋祭りドブ酒昔語りにし
丹精の菊は隣りに所望され

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

反対を味方に入れる策をねり
皆反対あきらめきれぬ恋でなし
反対する正しさが数に負け
反対もせず恋愛の娘を信じ
反対もせず主婦の座を守り
反対の裏に本音をちらつかせ
反対をしていた嫁の世話になり
活け花もかれて失恋の娘は黙り
泣けるだけ泣いて失恋忘れる気
インスタン時代と失恋気もやまず
みのらねど一筋の恋でし
指切りをしたまま風邪で起きられず
風邪薬どれが効くやら
甘えぐせ残して風邪の床をあげ
バカンの旅から風邪の貰って来
風の子のタコ風邪の子ふと手
作業衣の過去の写真をなつかし
背伸びした手から玩具の箱が落ち
引越の庭にけいとうの赤く咲き

堺文化祭川柳会 (堺市)

八木摩天郎報

我まを言ったと遺書しおらしい
縁談ばかりは妾の我まま通させて
幸福がいつばい新婚まだ三月

客足の絶間にのぞくコンパクト
客足の月給前がよく分り
すし詰めに満員御礼の幕を垂れ
詰めるだけ詰めて御乗車有難う
すし詰めの中の一人の瞳が不逞
すし詰を押しのけてゆく指定席
すし詰め船室救命具に近う
処女という魅力立っても座つても
よろめいて愚妻の魅力発見す
ギャングルの魅力が故郷捨てさせる
一人ふえ家旅計画もうくずれ
せんみんの人口を牧師羊にし
産制を市長夫人が提唱し
人口百万仁徳帝陵へ立つ煙
熱のある人口論へまだ飲む気

杏林川柳会 (大阪市)

中島生々庵報

好奇心慾も手伝いすって来る
好奇心でするお見合のしららし
身をつぶす株とも知らず好奇心
プライバシーあはれて迄も好奇心
ペラペラの支那語の元は好奇心
好奇心不惑が女にひっかかり
女難恐るべしはじめはほんの好奇心
要人狙撃好奇心で済まされず
たのしさも淋しさもある好奇心
好奇心をそのかきされてボラれて来
好奇心化けも化けたり文化章
親の目で見ればあぶない好奇心
好奇心餌についている糸知らず
見通しの甘さを好奇心にされ
老の目にあんまりカート短かすぎ

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

消費機構サンマも鯛と肩並べ
駐車禁止の貼紙がある道になり
逆くらげ近くで駐車兩人消え
駐車場に家の軒先又借られ
駐車して九回裏だけ見て帰り
星空に眠る自動車気味悪く
駐車待ち連ちゃん眠る外はない
喫茶店一軒ふさいで駐車する

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

療養の目にスモークの街遙か
家近くなると駆け出す癖につき
なんの罰坊さん交通事故に遭い
手帳見て予定があると取合わず
一日も手帳はなせぬ船になり
大物は手帳がわりの秘書をつれ
電化したのです仁徳天皇様
専門語ならべて素人煙に巻き
内幕の酔余にしては喋舌りすぎ
肩一つ叩かれ仕事預けられ
見られたますい手帳が見つからず
こんなとき火遁の術が使えたら
団体の紅一点はウバ桜
団体はイける同志が隣り合い
姿見は母の心を落着かせ
いい部下をお持ちですと返盆
停年が近く部下にまで弱気

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

すし詰めへ独りはほえむ興行主
すし詰めに大事な帯が気にかかり
すし詰めの列車で眼鏡ずつたまま
所得より母の横顔シワ倍増
横顔の汗も日給のうちにあり
横顔は大物らしい鼻の線
ライバルだとマスコミが決めており
ライバルに黙殺されて斗志湧き
ライバルに妻のすべてを診てもらい
たまたまのセット祭りの顔になり
みこっさんもつと飲みたい暴れよう
池の端を地車バレードして祭り
女房まだ祭りのふうをして居らず

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

愛されて枕カバーの花模様
弁当箱枕に秋の雲高し
お祖母ちゃんだけが断固と箱枕
將軍に枕して寝る世が久し
お見舞に行くに女のぎょうさん
碧空にわが人生の雲探る

空の秋東映初の優勝す
セックスがからみ安易に妥協する
団交へ妥協許さぬ労働歌
性質を明らかにして妥協する
晩酌の本ふえて妥協する
呼び鈴へコスモス抜けて来たピアフ
ひよろひよとコスモスのびて秋日和
コスモスの垣根貸し間をする暮し
昂奮を感じる句集隊にあり

宴会・出張パーティ・折詰弁当

大萬

梅里ノ店

料亭

館の店

串の店

阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(六三三)三九三五番
アベノ橋近地下食通街
TEL(六三三)〇一四七番
南区豊屋三ツ寺センター
TEL(三三三)九一八四番



柳樽室

路郎生

★ここに一九六四年を迎える。本年の柳界は自他ともにウンと飛躍したい。

★編集には特に新味を出したいと努力しているが新年号は柳人交歓広告其の他に多くのスペースを割いたので、十二分に發揮することが出来なかった。

★しかし研究員は富士野駿馬氏や岡田甫氏、丸十府氏等のベテラン揃い、執筆陣も東野大八氏を筆頭に、相変らずの健筆振りだ。「運転免許はパスしたが……」の座談会記事は時節柄好読物となった。

★今回から「私達の地下街」ランを新設した。ここで新人旧人の差別なしに大いに気を吐き、大いに論じてもらいたい。句会の選者を会場で選挙してはどういう意見をふわうすにへ発表していただければ、これなどは多少実行上困難ではあるが、臆すべき価値は充分だと思ふ。いい案をお互いに考えて見る必要がある。

★往年の革新川柳人、小田無限君が、不潔に抵抗して政治を捨て、自宅に亡命しているといつて来た。政治屋になるのであれば潔く政治を捨てての亡命大賛成。亡命も又人を作る。と返事をし出して、おいた。三思して惜しみなく人生を享せよといいたい。

★下手にうごめくより信州の山奥で、無心庵に今様良寛をきめこむ中島紫陽郎君の生活態度も一つの方法であろう。

★小生としては昼夜兼行で柳務と取っ組み合いに健康の限界まで来て、いるが、これが宿命だと思えば、人事を尽して天命を俟つより仕方がないだろう。

印刷部の支障で発行が遅れているところへ、全通のストで郵便物のストでますます皆さんに御迷惑をかける。十二月は全く受難の極月だった。ひたすら寛容を願う外言葉もな

い。

★終りに寄稿家ならばに愛読者諸氏が本年度のご活躍をお祈りして、川維支部句会

一月
 ☆玉造支部句会、10日
 (金)六時半、題、新品・仲よし・初仕事・所、市電
 玉造電停
 南百米大
 阪信用金庫
 ☆富柳句会、12日
 (日)一時、題、時、題、たべすぎ・落し玉・やまこ、所、富田
 林市立公民館
 ☆阿倍野支部句会、20日
 (月)六時半、題、半、題、一、ばい、一人・一夜演、所、所、

川柳雑誌社主催

本社新春句会

2月本社句会予告

兼題
 「冷静」
 「介抱」
 「日溜り」
 「スリル」

日時 一月七日(火)午後六時
 会場 自安寺(妙見さん)
 南区千日前電停東スグ北側
 電話 四一四七八番

兼題
 「天気晴朗」三句 中島生々庵選
 「振出し」三句 菊沢小松園選
 「あだ名」三句 黒川紫香選
 「弾く」三句 吉田圭井堂選

席題 三題 当日発表
 麻生路郎

表彰 昭和三十八年度不朽賞優勝者
 一カ年間本社句会全出席者

短冊交換会 有志の方は各自一葉ご持参
 呈賞 各題天地人・各題天位を路郎選により 天位に不朽賞

会費 百円

★投句だけの方は郵券三十四封入
 (メ切は一月五日)本社宛

阿倍野区松崎町三の一
 ☆割烹大万
 ☆京都支部句会、16日
 (木)夕、題、空(ソラ)
 ・早合点、娯、所、四条
 縄手仲源寺

☆南海電鉄句会、16日(木)
 六時、題、交
 通社・中心・誤
 解、所、難波高
 架下親和クラ
 プ。☆明和研
 究句会、12日
 (日)一時、題、日向ほこ
 ・インキ・鏡、所、阪神鳴尾
 駅東南二百米
 鳴尾公民館

☆かがみ句会、11日
 (土)題、豪華・晴着
 ・駄足・ぎりぎり・交
 渉、所、池田古心居

福壽司

心斎橋筋大丸前
 電話(271)三三四四番

Printed in Japan

(禁転載)

川柳雑誌

三十九年 第一号
 定価 一一〇円 (送料六円)

半力年 七五〇円
 一カ年、一四四〇円(送料)

昭和三十八年十二月廿五日印刷
 昭和三十九年一月一日発行

大阪市住吉区西四丁目二五番地
 行印刷所 麻生幸二郎

発行所 川柳雑誌社
 電話大阪(75)一六〇八
 郵政口座大阪七五〇五〇番

募 集

課題吟募集

風策 (十句以内)
 サンプル (十句以内)
 一ト筋 (十句以内)
 山の宿 (十句以内)
 緑線 (十句以内)

尼緑之助選
 小西無鬼選
 吉田圭井堂選
 (二月十五日締切)

松江梅里選
 山路白星選
 木村水洞選
 (十二月十五日締切)

投稿規定

投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
 「近作柳塔」は一般作家の雅吟を募る。
 「課題吟」は誰でも投句が出来る。
 「川柳塔」の投句は不朽賞会員に限る。

近作柳塔 (雅誼十句以内)
 川柳塔 (雅誼十句以内)
 文章 (評論・研究・感想其他)
 (毎月十五日締切)

毎号募集
 麻生路郎選
 北川春巢選
 麻生路郎選



国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

風光明媚な海岸美を誇る
国際観光旅館

う お また ろ
魚又楼

TEL 和歌山 ④ 0431・0387



初 南海沿線 詣

住吉大社 住吉公園下車 50円

水間観音 貝塚のりかえ水間320円

東照宮 和歌山市から電車420円

紀三井寺 和歌山市から電車420円

大鳥大社・方違神社・百舌鳥八幡宮

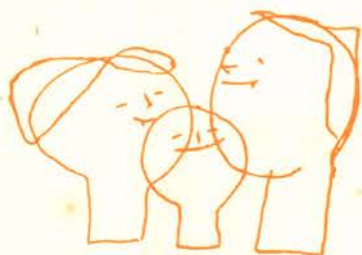
……… 運賃はいずれもなんばからの往復です

お問い合わせ

(641)8686
(716)8661

南海電車

一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

麻生路郎先生著

川柳とは何か

——川柳の作り方と味わい方——

価 二五〇円
送 七〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

昭和廿二年七月一日 第三換郵便物認可
昭和廿九年一月一日発行 (毎月一回一日発行)

編集 桑田 義
発行印刷人 桑田 義

編集 桑田 義
発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西成五丁目二五番地 電話大阪(671)六〇八一
新幹線大阪七五〇五番

正価百二十円 (送料別)

ことしも…
アスパラ
マルゴ
タナベ

こんな時こそアスパラを
○疲れ易い時 疲れた時
○心臓が悪い時
○肝臓が弱っている時
○神経痛・筋肉痛・二日酔
疲れ目・手足の脱力感
六〇錠三〇〇円 一二〇錠五〇〇円
三〇〇錠一、一〇〇円
アンプル三〇円 ドリンク二二〇円

あたたかい近鉄特急 2階電車で…
お伊勢さん初詣
伊勢志摩 初旅

大阪上本町から 特急 1時間52分 片道630円
京都から八木のりかえ 2時間27分 片道680円
名古屋から 特急 1時間28分 片道530円
(運賃は運賃指定 特急券とも・子ども半額)
◆伊勢志摩へ… 宇治山田駅前
から二見・鳥羽など志摩の観光地へバス連絡

近鉄



賀 正

菊正宗

清酒

一番よい酒
うまい酒

宮内庁御用達
株式会社 本嘉納商店
神戸・灘・御影